

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書第95集

坪ノ内遺跡Ⅰ

— 四国横断自動車道路(須崎市～窪川町)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2006.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

坪ノ内遺跡Ⅰ

－四国横断自動車道路(須崎市～窪川町)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2006.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

緑なす山々と青く輝く海、自然の恵みに育まれた中土佐町久礼は、林業と漁業の町として知られていますが、「おみこくさん」と呼ばれる久礼八幡大祭や五輪塔などにも見られるように地域色豊かな歴史と文化の町でもあります。

この程、高速道路建設に伴い坪ノ内遺跡の調査が行われ報告書が刊行されることとなりました。鎌倉時代から戦国時代に至る遺構、多くの貿易陶磁器の出土、別けても大型建物の検出は久礼の果たしてきた物資交流の要衝としての歴史的役割を象徴的に示しているものです。

高速道路が建設され、久礼の新たな発展が期待されている今、先人たちによって刻まれた歴史の一ページが明らかになったことは大変意義深いものがあると思います。この成果が豊かな地域史の復元に寄与し、地域の再発見に繋がるとともに斯学の向上に寄与できれば幸いです。

最後に発掘調査に従事して下さった現場作業員の皆様、また調査にあたって絶大な協力を頂いた中土佐町に対しまして厚くお礼を申し上げます。

平成18年3月

財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 川村 寿雄

例 言

- 1 本書は、四国横断自動車道（須崎市～窪川町）埋蔵文化財発掘調査業務委託による坪ノ内遺跡A区の発掘調査報告書である。B区他については平成17年度に調査を実施しており、本報告書は『坪ノ内遺跡Ⅰ』とした。
- 2 坪ノ内遺跡は、高知県高岡郡中土佐町久礼道の川坪ノ内4645-1他に所在する。
- 3 発掘調査は、高知県教育委員会から委託を受けて（財）高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 調査期間は、平成16年6月7日～7月15日である。整理作業は平成16年8月1日～17年3月31日まで行った。
- 5 調査面積は、1500㎡である。
- 6 調査体制
調査は、出原恵三（財 高知県文化財団埋蔵文化財センター 調査第3班長）が行い、同センターの吉成承三、前田憲司の援助を得た。
- 7 本書の編集・執筆は出原恵三が行った。
- 8 出土遺物の整理の中で特に近世陶磁器については浜田恵子氏（高知市教育委員会）、銭貨については矢野雅子氏からご教示を得た。
- 9 現場作業・整理作業は下記の方々に従事して頂いた。
現場作業 池田征郎・岡村和雄・奥田義教・浜田秋弘・浜田勝猪・浜田康男・前田健一
前田なるみ・久川光子
整理作業 浜田雅代・松木富子
- 10 調査の実施については、中土佐町職員林勇作氏、山口正人氏および中土佐町の田中としお氏に絶大な協力と援助を頂いた。記して感謝の意を表したい。
- 11 出土遺物の注記は出土略号04-4NTとし、図面、写真等資料とともに高知県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
第Ⅱ章 遺跡周辺の歴史・地理的環境	2
第Ⅲ章 調査区の概要と調査の方法	4
第Ⅳ章 調査の成果	6
第Ⅴ章 まとめ	27

挿図目次

Fig.1：坪ノ内遺跡位置
Fig.2：坪ノ内遺跡の位置と周辺の遺跡分布図
Fig.3：調査区位置図
Fig.4：遺構全体図
Fig.5：基本層準
Fig.6：SB1平面図
Fig.7：SB1出土遺物
Fig.8：SB1-P12・16平面・エレベーション
Fig.9：SK1～4・7・8平面図
Fig.10：SK1～4・7・8出土遺物
Fig.11：SK9平面図
Fig.12：SK5・7・9、ピット、集石出土遺物
Fig.13：Aトレンチ・包含層Ⅰ～Ⅲ層出土遺物
Fig.14：包含層Ⅲ層出土遺物
Fig.15：包含層Ⅳ層、山際出土遺物(1)
Fig.16：山際出土遺物(2)
Fig.17：山際出土遺物(3)
Fig.18：山際出土遺物(4)、包含層出土遺物

写真図版目次

PL1 調査前風景
PL2 調査前風景、調査区北部の段部
PL3 調査区南部Cトレンチ付近、完掘状況
PL4 SB1
PL5 調査区南部の切岸と盛土
PL6 北部段上の集石、SK9検出面上の礫群
PL7 遺物出土状況
PL8 ピット及び遺物出土状況
PL9 土師器鍋・羽釜、瓦質鍋・羽釜
PL10 古瀬戸瓶子・天目茶碗、上絵付陶器碗・上絵付磁器徳利
PL11 青磁碗・皿
PL12 陶器鉢
PL13 肥前産磁器皿
PL14 瓦器碗、白磁杯・皿
PL15 東播系捏鉢、備前播鉢、土師器捏鉢
PL16 土師器杯、古瀬戸香炉、肥前産甕、青磁碗、肥前系陶器鉢
PL17 肥前系陶器鉢、肥前産磁器碗、波佐見産磁器皿
PL18 波佐見産磁器皿、肥前系磁器蓋、尾戸産陶器碗、肥前産磁器碗、石鍋
PL19 土錘、刀、古銭、煙管、青銅金具

第 I 章 調査にいたる経過

四国横断自動車道路（須崎市～窪川町）建設予定には西山城が所在しているが、平野部においては埋蔵文化財包蔵地等の確認はなされていない。高知県教育委員会は、中土佐インター予定地について周辺の立地環境から遺跡の存在する可能性があるとの判断から、インター予定地（中土佐町久礼道の川地区）について試掘調査を実施した。試掘調査は予定地内に31個の試掘グリッドを設け、平成15年11月20日から12月9日まで行った。試掘地点は、現水田部分と町道線沿いの山裾部分に分けることができるが、前者からは流れ込みと考えられる遺物包含層が確認され、後者の山裾部分においては中世の遺物やピットを検出した。周辺の状況から見て町道道の川1号線の山側の平坦地には、当該期の集落址の存在を予想し得る成果を得たのである。遺物・遺構が確認された付近について坪ノ内遺跡として登録した。

中土佐インターの工事が計画通り行われれば遺跡が破壊されることから、高知県教育委員会は日本道路公団四国支社高知工事事務所と協議を行い、工事対象地について事前の発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、山裾部の北部をA区、南部をB区として、まず工用道路が建設されるA区の調査を行うこととなった。四国横断自動車道路（須崎市～窪川町）区間は、国土交通省の新直轄事業として実施されることとなり、国交省からの委託により日本道路公団（現西日本高速道路株式会社）から高知県教育委員会が委託を受け、再委託により(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなり、平成16年6月1日付けで高知県教育委員会と業務委託契約を締結し、6月7日から発掘調査を開始した。



Fig.1 坪ノ内遺跡位置図

第II章 遺跡周辺の歴史・地理的環境

坪ノ内遺跡のある高岡郡中土佐町久礼は、高知市から西南方向に約40kmのところであり高知平野と県西南部とを結ぶ中継地点に位置している。南北に長く延びる町で、その地勢は東側が海岸線となり太平洋に臨むが、他の三方は四国山脈から派生した山塊に覆われ平野部は狭小である。東側に派生した尾根は先端に至って土佐湾に突出し岬となりリアス式海岸を形成して景観の美を誇っている。岬の懐には久礼湾、上ノ加江、矢井賀など良港が発達し「カツオ一本釣り」など町の基幹産業である漁業の基地を提供してきたが、これらの港は陸路が峻険なことから海上交通の要衝としても重要な役割を担って来たのである。久礼湾の西側には松の川はじめ複数の河川によって形成された扇状地が発達し、町内で最も大きな平野部が広がり、町の文化・経済の中心地となっている。

坪ノ内遺跡は、久礼湾に注ぐ久礼川の支流である松の川に向かって開けた谷間の開口部に立地し、標高6～7m前後、久礼湾汀線からはおおよそ1500m程のところにある。中土佐町における先史文化はほとんど明らかになっていない。笹場岬と押岡岬の間の小湾奥にある押岡遺跡から縄文時代の磨製石斧が1点出土している。また出土地点は不明であるが久礼八幡宮には中広形銅戈が1口、神宝として所蔵されている。部分的に刃毀れが見られるが全体の形状を留めている。全長32.4cm、身の最大幅4.6cm、胡長10.6cm、内の長さ2.2cm・幅2.2cmを測る。樋には綾杉文が鋳出されている。本県における九州産の武器形祭器のうち銅矛形祭器と銅戈形祭器は、南予から西隣の窪川台地に集積され高知平野に流入することが想定されている¹⁾が、陸路であれ海路であれ当地が中継地となっていたことを示唆するものである。古墳時代から古代の遺跡・遺物は未確認である。

久礼の地名が記録に登場するのは、13世紀半ば、『九条家文書』に見える建長2年（1250）11月の九条道家の初度処分状に「土左国幡多郡 本庄 大方庄 山田庄 以南村 加納久礼別符」の記載が最初である。久礼は高岡郡に属していたが幡多庄の一部として九条家の荘園となっていたものと考えられている²⁾。久礼神山町大師堂には暦応2年（1339）銘の五輪塔、灰原宗善寺跡にも鎌倉後期～南北朝期の五輪塔が見られ、久礼八幡宮には明德3年（1392）銘の鰐口が伝承されている³⁾。これらは、中世に至ってこの地に新たな胎動が生じていたことを示すものである。戦国期には国侍佐竹氏の久礼城をはじめ西山城、青木城など平野部と久礼湾を囲むように山城が造営されている。当地が南北交通の要であり、物資集積の港としての役割を果たしていたことを意味している。

(註)

- 1) 出原恵三「弥生から古墳へー前期古墳空白地域の動向」『考古学研究』第40巻第2号考古学研究会1993年
- 2) 前田和男他『中土佐町史』中土佐町1986年
- 3) 林 勇作『中土佐町の文化財』中土佐町教育委員会1996年



Fig.2 坪ノ内遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

第Ⅲ章 調査区の概要と調査の方法

1. 調査区の概要 (Fig.3・4)

調査区は、町道道の川1号線と山地との間に開けた狭隘な地勢にある。北部は平坦面となっていたが、南部としたところは、北部より1～3mほど高く畑地や屋敷地となり北部との境には石垣が詰まっていた。調査区の北側も畑地となり一段高くなっており、西側の一部にも地山削り出しによる段が残り山裾に繋がっている。西北部の段の切れたところから南部までの間は、石垣が詰まっていた。また調査中に判明したことであるが、南部とした屋敷地と宅地は地山掘削と盛土とによる造成地である。調査区も含めて周辺は、山地斜面の掘削を繰り返し、削平と盛土による宅地や畑地の造成が行われてきたところである。造成が何時の時期から開始されたのかとすることが地域史にとって重要な事項となる。

2. 調査の方法

調査に入った段階には、西側の山斜面部の伐採による雑木が調査区内に広く散乱しており、その除去から着手した。雑木の除去後、重機を用いて表土層を剥ぎ取り、第三層の遺物包含層からは人力により掘削を行った。遺物の取り上げや遺構については、公共座標を基に4m方眼を組んで地点を記録した。南北方向に数字(北から1・2・3・・・)を、東西方向にはアルファベット(西からA・B・C・・・)を冠して記録につとめた。

当初の計画では、平坦地である北部(約400㎡)のみが調査の対象となっていたが、遺構検出を進めるうちに南部にも遺構の一部が掛かることから調査区を南に拡張した。南部の西側部分は高さ3m程の石垣が詰まった屋敷地であったが重機を用いて掘削し盛土を除去して山側の地山面まで拡張した。比較的盛土の少ない東側を更に南に拡張したが遺構が認められなかった。また南部の調査区は北部に比べて東側が狭くなっているが、ここは表土直下が砂礫層となっており、遺物包含層や遺構の存在が認められないことが拡張の当初に確認されたことから調査区から除外した。

基本層準の観察は、北部にAトレンチ(長さ13.3m)、Bトレンチ(長さ15m)、南部にCトレンチ(長さ10.5m)を設定して行った。

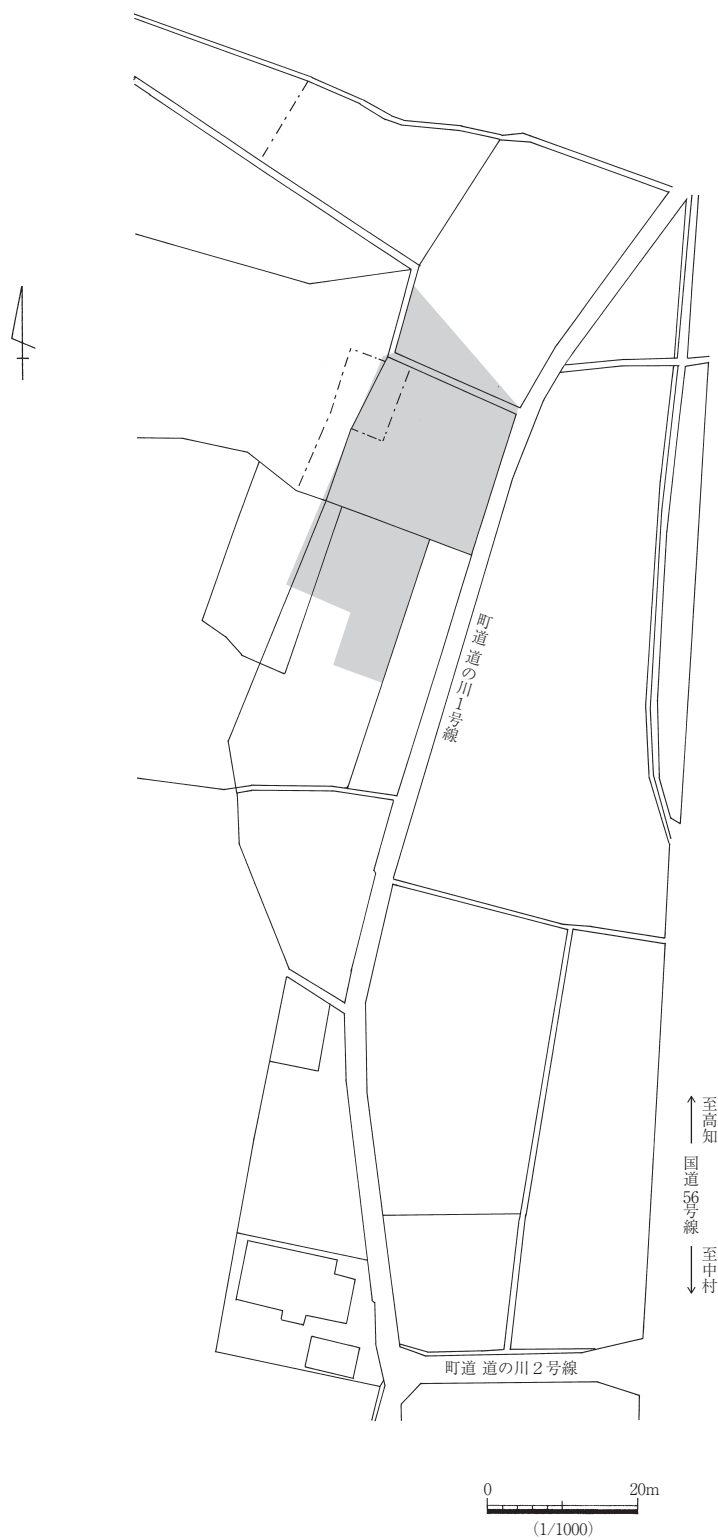


Fig.3 調査区位置図

第IV章 調査の成果

1. 基本層準

(1) Aトレンチ (Fig.5)

北部に設けた東西のトレンチで、耕作土と床土を除去し、遺物包含層を下げる段階で設定した。

Ⅲ層：2～3cm大の風化礫を多く含んだ茶色粘性土で炭化物を含む。12～15世紀代の遺物包含層である。ほぼ全域に堆積が認められるが西側（山側）には浅く、東側に厚い。東側3分の1はⅧ層の上に堆積している。

Ⅳ層：1cm～拳大の礫層である。中央部の一部にのみ厚さ20cmで堆積している。Ⅴ層との関係は不明であるが、明らかに置き土であり整地層の一部である。

Ⅴ層：明茶色小礫層で少量の炭化物を含む。トレンチの西側3分の2ほどの範囲に認められるが、随所をピットによって切られているためにブロック状をなす。無遺物層であるⅧ層の認められないところ、或いはⅧ層が凹状を呈するところに堆積しており、本層準も置き土とすることができる。

Ⅴ'層：小礫層を含んだ明茶色粘性土で、西部の一部に認められるのみである。置き土である。

Ⅵ層：Ⅳ層の下層で認められた。茶色粘土で層厚は2～3cmで、Ⅷ層の上に敷かれたような状況を呈している。本層準からは梅瓶口縁部 (Fig.13-59) が出土している。置き土である。

Ⅶ層：風化礫を含んだ灰黒色粘性土で、西端部で確認した。無遺物層である。

Ⅷ層：1cm前後の風化礫を含んだ茶黄色粘性土である。無遺物層で地山面を形成している。

Aトレンチの層準は、複雑な堆積を示しているが、先ずⅧ層の上にⅣ～Ⅵ層の整地層が形成され、それを基盤に大小の柱穴が掘り込まれている。整地層が何時形成されたのか明確にすることはできないが、後述する大型建物造営に際して行われた可能性が考えられる。整地層中の遺物は僅少であるがⅢ層に比べて古いものを含んでいることから、整地の際に以前に存在していた遺構を破壊した可能性がある。

(2) Bトレンチ (Fig.5)

北部の調査区東壁に設けたトレンチである。

Ⅰ層：現地表を形成する耕作土である。層厚30～40cmである。

Ⅱ層：床土である。

Ⅱ'層：Ⅱ層に類似した層準で中央部に認められる。

Ⅲ層：2～3cm大の風化礫を含む茶色粘性土で炭化物や遺物を多く含む。AトレンチのⅢ層に対応する。層厚は20～40cmほどを測り、南にむかって層厚を増している。

Ⅳ層：1～4cm大の礫、炭化物を含む濃茶色粘性土である。層厚0～20cmを測るが、南に向かって層厚を減じ、南端部では認められない。AトレンチのⅧ層に対応する。

Ⅴ層：礫層である。無遺物層である。

(3) Cトレンチ (Fig.5)

南部に設けた東西のトレンチである。



Fig.4 遺構全体図 (● 集石)

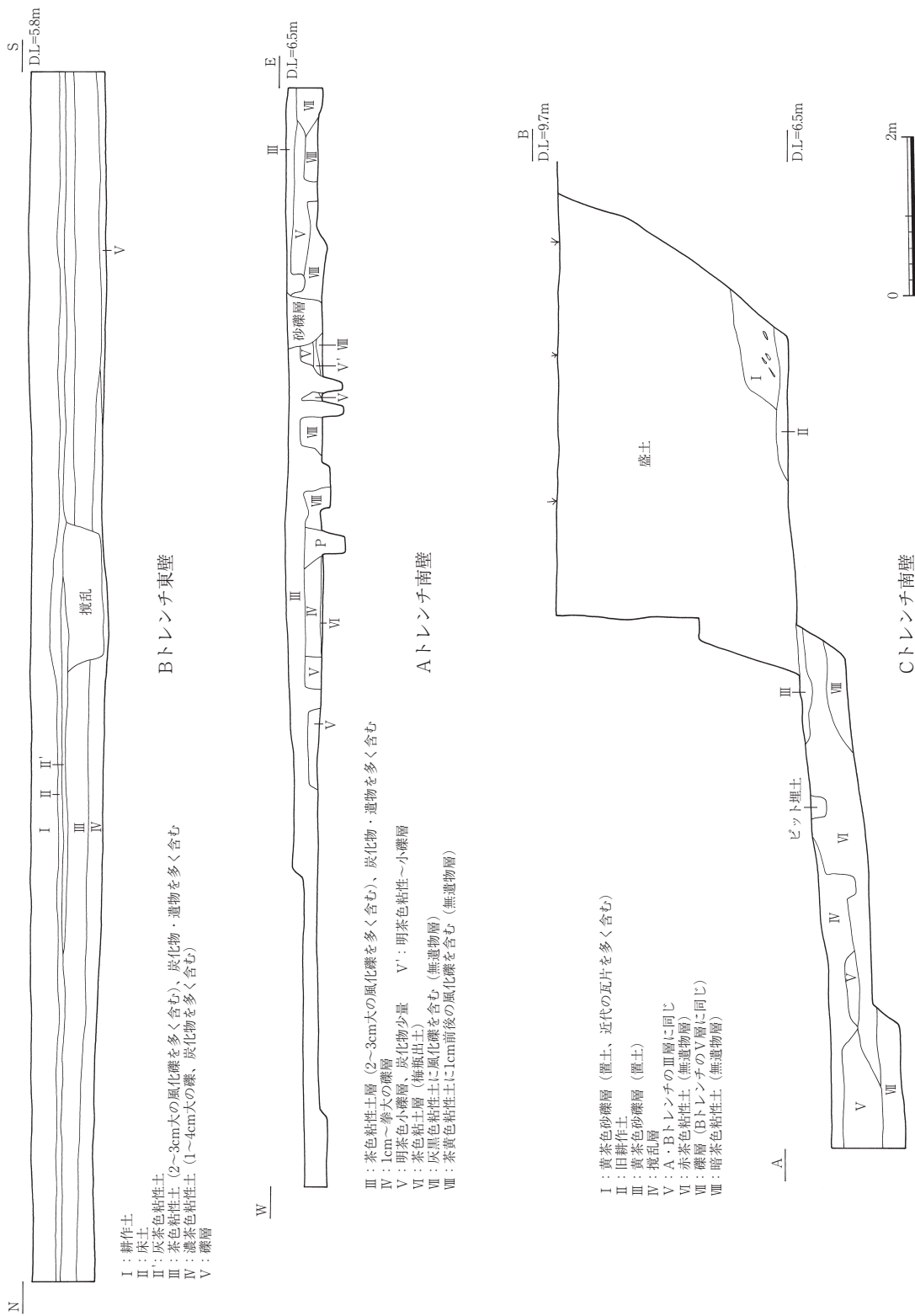


Fig.5 基本層準

盛土：西側の山腹を掘削した盛土で厚さ3mを測る。上面は平坦面をなし削平面と共に宅地として造成されている。近代以降の盛土である。図面右の立ち上がりは、近世段階に削平整地された際の地山面である。

I層：黄茶色砂礫層で近代の瓦片を多く含んでいる。瓦廃棄後に地山面が崩落堆積した層準である。

II層：旧耕作土である。

III層：中央部の一部にのみ認められる。黄茶色砂礫層で置き土である。

IV層：近代攪乱層である。

V層：2～3cm大の風化礫を含む茶色粘性土で炭化物や遺物を多く含む。A・BトレンチのIII層に対応する。

VI層：赤茶色粘性土で、無遺物層である。

VII層：礫層でBトレンチのV層に対応する。

VIII層：暗茶色粘性土で無遺物層である。

2. 検出遺構と遺物

(1) 掘立柱建物 SB1 (Fig.6～8)

調査区の中央部に位置し、遺物包含層であるIII層を除去した段階で検出した。梁間3間(6.4m)×桁行5間(11.6m)の南北棟で、長軸はN-20°-Eを示し、面積は約75㎡を測る。23個の柱穴から成る総柱建物と考えられるが、P18とP19の間の柱穴を確認することができなかった。柱穴掘り方の平面形は、円形、楕円形、隅丸形状のものが見られ、その長軸規模は50cmから80cmまで認められ、60～70cmのものが多い。深さは20～65cmで断面形は総じて円筒状を呈する。埋土は概ねA・BトレンチのIII層と同様である。柱穴間の長さはP5～23は概ね2.0mであるのに対して、P1～4との桁方向の長さは2.5mとなっている。このことは、一間分の拡張の可能性もある。

柱痕跡はP1・4～7・9・13・14・17・18・20で認められ、直径は20～30cmを測る。P5・12・16の底部には河原石や角礫の礎板が置かれている。P12は最大で一辺20cmを測る比較的扁平な角礫を5個敷き詰めている。P16は一辺30cm、厚さ15cmを測る河原石を打ち欠いた大きな礎板が置かれていた。

遺物は、掘り方埋土を中心に土師器、瓦器、青磁などが出土している。1・2は土師器小皿でP19・7から出土している。3～8は土師器杯である。4はP6の床面から、7はP12の中央部、礎板から6cm浮いて出土している。ほぼ完形品で、柱抜き取り穴に入れられたものでありSB1の廃絶時期を示す遺物である。9・10・12・13は和泉型の瓦器椀である。9・10・13はP18の柱痕跡の床面から出土している。9と13は同一個体と考えられ、内面に暗文が認められる。13には細い高台が貼付されている。11はP18掘り方埋土出土の黒色土器A類椀底部で、底部には特有の断面三角形の細い高台が認められる。14は瓦質搦鉢でP22の掘り方埋土から出土している。15は東播系搦鉢でP14から出土している。16は青磁碗底部でP5埋土から、17は東播系搦鉢でP4検出面から出土している。18はP14検出面下から出土した古瀬戸の袴腰形香炉である。口縁部と体部外面に灰釉、底部は糸切りで瘤状の台を2個確認できる。19は龍泉窯の青磁碗である。内面に櫛目や片切り彫りによる文様

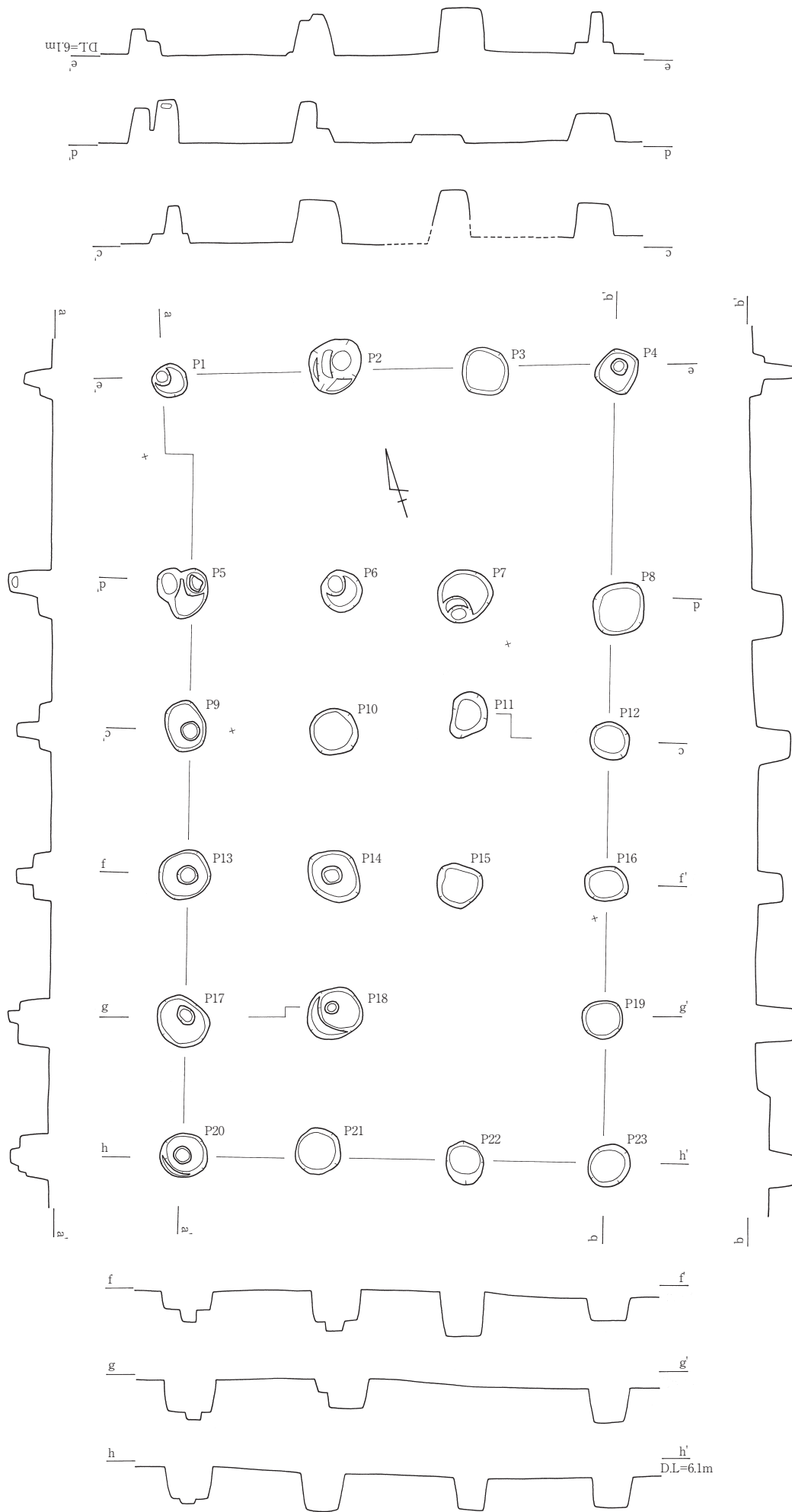
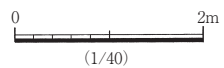


Fig.6 SB1平面图



が見られる。先に挙げた瓦器椀9・10・13と共にP18の柱痕跡の床面から出土している。この他土錘が4点(20～23)がP6・15・16・21から出土している。

以上述べてきたようにSB1の柱穴からは時期幅を持った遺物が出土しており、建物の時期を確定することが難しい。10世紀代と考えられているP18出土の黒色土器椀(11)は別としても、12～13世紀代の遺物が集中するP18と15世紀代に比定しなければならないP12の土師器杯やP14の古瀬戸香炉、また東播系捏鉢にも時期差が認められる。多時期にわたるこれらの遺物の存在からSB1の時期を求めることは難しいが、P12の土師器杯(7)と古瀬戸香炉(18)を根拠に、この建物は15世紀代に機能し廃絶されたものとする。すでに述べたように、Aトレンチの断面観察から古い時期の遺物を含んだ整地層が確認されておりVI層からは12世紀代に比定される瀬戸瓶子も出土している。P18などから出土した古相の遺物は概ね12世紀代に比定できるものであり、この時期の遺物は、SB1建立時に混入したものとして捉えることができる。また建物南部の各柱穴の周りにはほぼ同様の形態と規模を持った掘り込みが見られる。これらの掘り込みはSB1以前に存在していた建物の柱穴の一部を構成している可能性もあり、立て替えや拡張も考えられる。

(2) 土坑

SK1 (Fig.10)

調査区北東隅に位置する。平面不整形の土坑で、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ20cmを測る。埋土は茶褐色砂礫土炭化物を含んでいる。床面上に炭化物が薄く堆積している。遺物は検出面下5cmのところから青磁口縁部(24)が出土している。口縁部が外反し内外面無文である。この他に土師器杯細片6点、瓦器椀細片2点、土師器羽釜細片2点、土錘片2点出土している。15世紀代の土坑である。

SK2 (Fig.10)

調査区北部に位置する。平面楕円形の土坑で長軸1.6m、短軸1.0m、深さ8cmを測る。検出面には炭化物と焼土の広がりが見られた。北壁をピットに切られており、床面に径30cm前後のピットが掘り込まれているが先後関係は不明である。埋土は2～3cm大の風化礫を多く含んだ茶色粘性土で炭化物を含む。遺物は、検出面直下から青磁碗底部(25)が出土している。見込みに片切り彫りの文様を有する。この他、土師器杯細片1点、床面から瓦器椀細片1点出土している。

SK3 (Fig.10)

調査区北東部に位置する。平面楕円形の土坑で長軸3.5m、短軸2.1m、深さ10～30cmを測り、床面は二段に掘られている。埋土は茶色粘性土で炭化物を含む。遺物は土師器細片4点、瓦器椀細片1点出土している。

SK4 (Fig.10)

SK3に隣接している。平面楕円形の土坑で長軸2.0m、短軸1.7m、深さ45cmを測り、断面は逆台形状を呈する。埋土は茶色粘性土で炭化物を含む。P13と切り合っているが先後関係不明である。

SK5 (Fig.12)

調査区南部に位置する。径1m前後の円形の土坑で、壁面に「ハンダ」が認められた。深さは50cm前後を測り、埋土は灰色粘性土で、埋土中には角礫や近代の瓦片、備前甕胴部片1点と煙管(32)

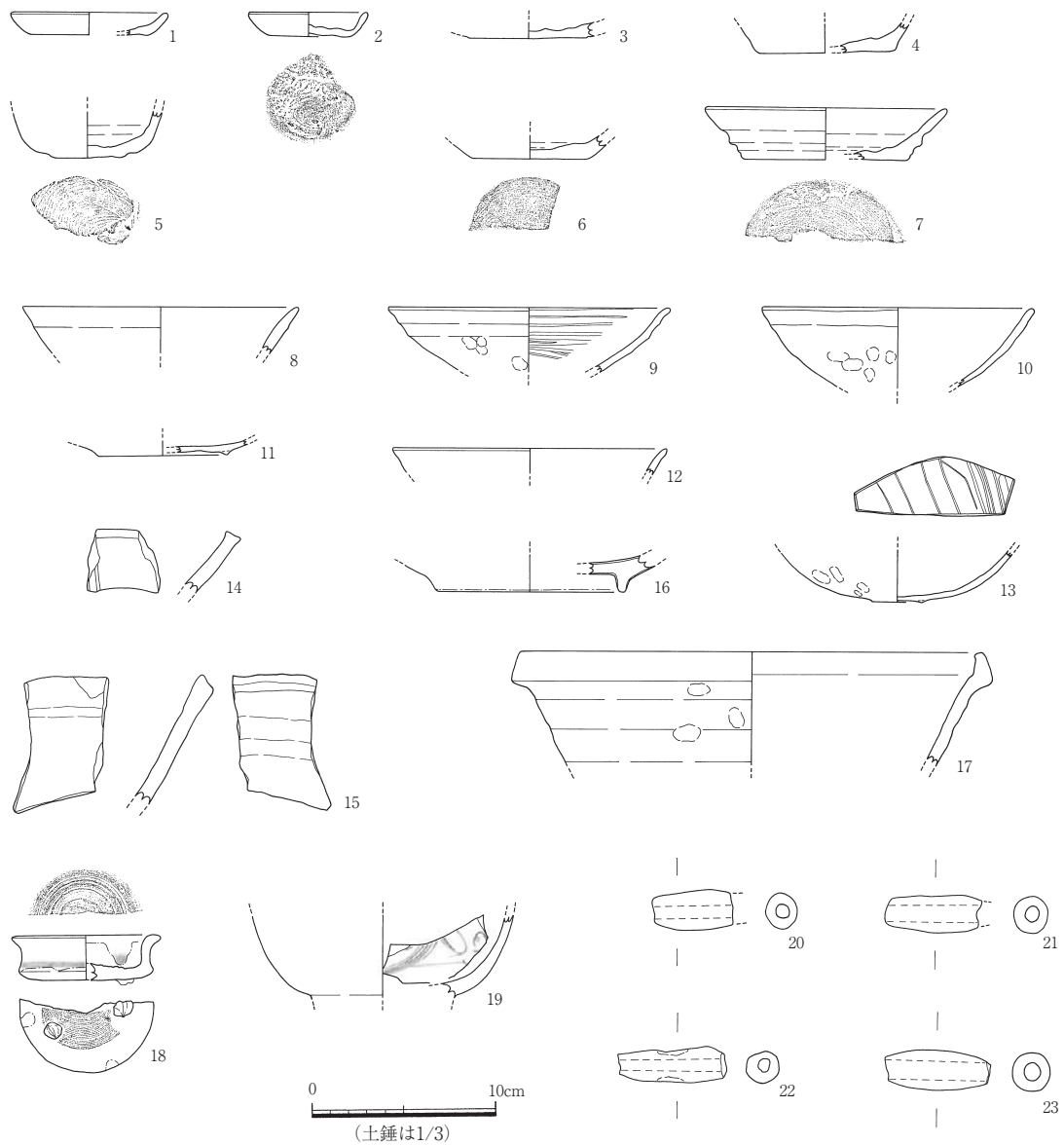
が出土している。「ハンダ」の出現は『皆山集』によると1799年であるから、それ以後の土坑である。

SK6

調査区の南部に位置する。平面楕円形の土坑で長軸1.6m、短軸1.3m、深さ30cmを測り、断面円筒状の土坑である。埋土は褐灰色シルトに灰色粘土がブロック状に混入している。遺物は青磁細片と白磁小皿細片が出土している。近・現代の土坑である。

SK7 (Fig.10・12)

調査区南西部に位置する。平面楕円形の土坑で長軸1.2m、短軸0.96m、深さ12cmを測る。壁は緩やかに立ち上がっている。埋土はI層：焼土を多く含む黄色シルト層、II層：炭化物である。I層



土師器小皿：1・2、土師器杯：3～8、瓦器碗：9～13、瓦質搦鉢：14、青磁碗16・19、東播系捏鉢：15・17、瀬戸香炉：18
土鍾：20～23

(P2：5、P3：3・6、P4：17、P5：16、P6：4・23、P7：2、P8：8、P12：7、P14：12・15・18、P15：20、P16：22、)
P18：9～11・13・19、P19：1、P21：21、P22：14

Fig.7 SB1出土遺物

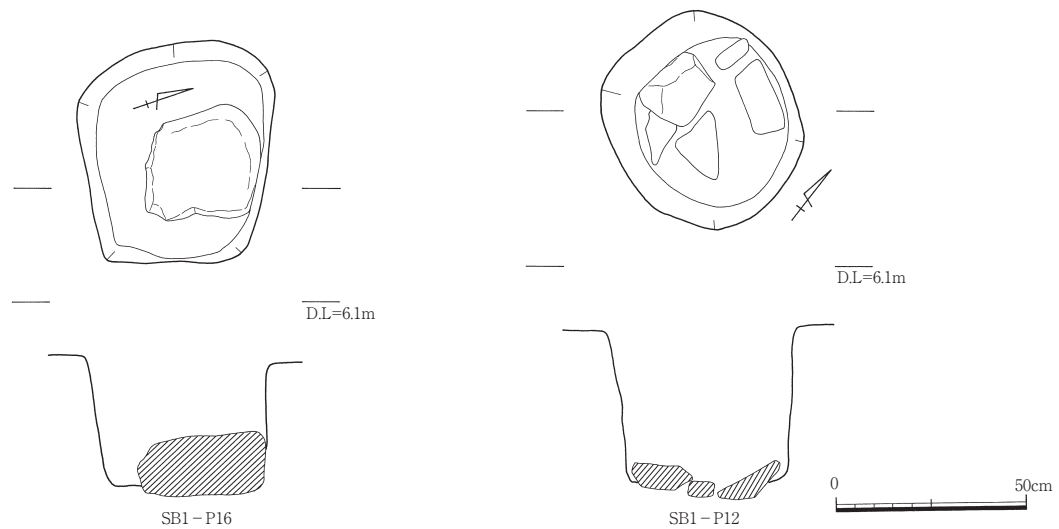


Fig.8 SB1-P12・16平面・エレベーション

から金具と考えられる銅製品が出土している。

SK8 (Fig.10)

調査区南西部に位置し、SK7と長軸を共有して並んでいる。平面楕円形の土坑で長軸1.08m、短軸0.7m、深さ20cmを測る。断面は逆台形状を呈する。埋土はⅠ層：焼土を多く含む黄色シルト、Ⅱ層：炭化物、Ⅲ層：灰色シルトである。Ⅲ層中から2枚の鉄銭（29・30）、東壁から2枚の銅銭（28・31）が出土している。銭種は何れも寛永通寶である。字体が明瞭に判読できる31は、「八貝寶」であることから新寛永（1668年初鑄）とすることができる。床面より肥前産灰釉小皿（26）と肥前産陶器鉢底部（27）が出土している。SK7・8は火葬墓の可能性がある。

SK9 (Fig.11・12)

調査区東部に位置する。径1.6m前後の円形の土坑であるが、南部に幅30cmの浅い突出部を有する。深さ50cmを測り、断面台形状を呈する。先ず、図示したようにA・Bトレンチで確認したⅢ層を切って形成された拳大から人頭大の集石を検出した。最初は井戸かと思ったが、集石を除去して精査したところ集石の輪郭に沿うように掘られた土坑を検出した。集石中から土師器細片3点、備前播鉢細片1点、近世陶磁器細片3点、瓦片1点と土錘1点（58）が出土している。この土錘の胎土は赤色風化礫を多く含んでおり、後述する中世ピット出土のそれが精土であるのとは異なっている。土坑の埋土は茶灰色の砂礫である。遺物は土師器杯細片1点、青磁細片1点、備前細片1点、近世陶磁器細片2点が出土しているが、図示できるものはない。近世の土坑である。

(3) ピット (Fig.12)

SB1以外に210個余のピットを検出した。これらの多くは柱穴と考えられるが、建物を復元することはできなかった。これらの内で61個のピットから何らかの遺物が出土している。出土遺物及び埋土から確実に近世に属するものはP33・54・55の他4個の7個で、それ以外のものは12～15世紀に属するものが多いと考えられる。そして当該期のピットは、SB1とその北部に集中しており、SB1

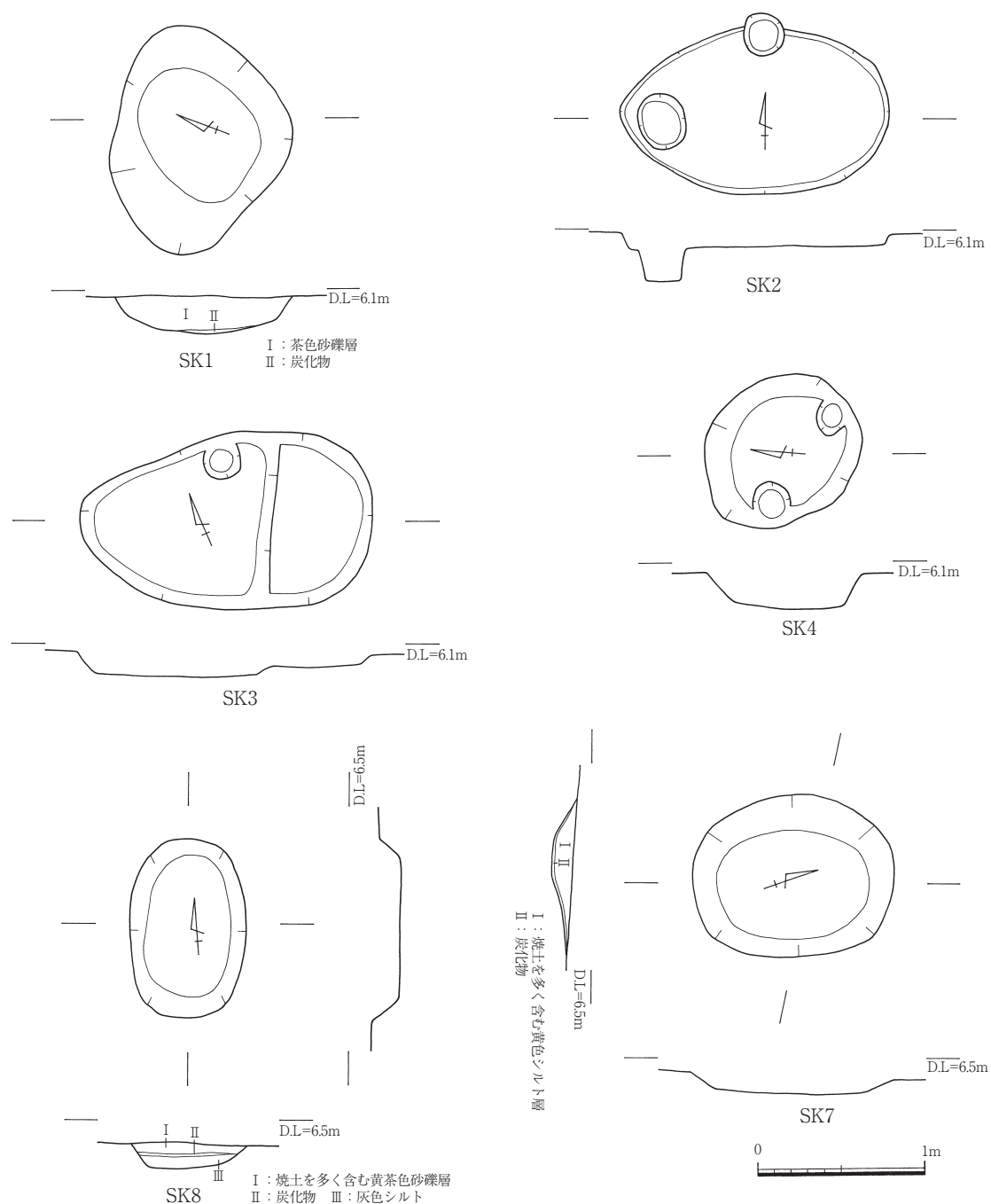


Fig.9 SK1~4・7・8平面図

から南は分布が希薄である。

以下図示し得た遺物について記述する。34・35はP14・22出土の土師器小皿である。36~39は土師器杯で、P29・38・43・44出土である。これらの土師器は全て糸切りで38は著しく歪なつくりである。40はP61出土の瓦器椀、41はP51出土の青磁碗、42は生産地不明の陶器碗でP33から出土している。43・44はP51・41出土の白磁皿である。48・49は龍泉窯の青磁碗で前者は鎬連弁が見られる。46はP54出土の肥前系蓋物身、口縁部露胎、外面に植物を描いている。51は土師器羽釜、P12

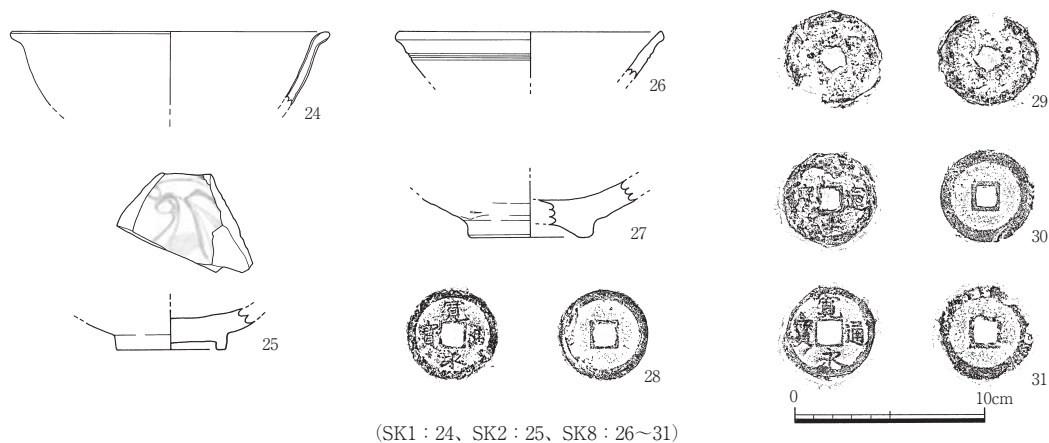


Fig.10 SK1~4・7・8出土遺物

出土である。この他P6・21・27・50・58から土錘が6点(52~57)出土している。これらの胎土は精土である。

(4) 集石 (Fig.4・12)

調査区北端に位置し、これまでに見てきた遺構検出面からは1m程高くなっている。表土層を除去すると径5m程の範囲に拳大程の角礫が密集して検出された。集石は地山面の上に形成されている。性格は不明であるが建物の基礎部分の可能性もある。集石間より近世陶磁器が少量出土している。図示し得たのは3点である。45は肥前産灰釉丸碗で、17世紀後半から18世紀前葉に時期比定されている。47は緑釉皿、50は二彩手の折縁皿である。両者とも肥前産で18世紀前半代に属するものである。

(5) トレンチ出土の遺物 (Fig.13)

先に述べたA・B・Cトレンチの中でAトレンチから図示できる遺物が3点出土している。59はⅥ層出土の古瀬戸瓶子の口縁部である。灰色精緻な胎土で内外面に薄緑色の灰釉が施釉されている。古瀬戸前期様式に属する。60はⅢ層出土の青磁碗である。口縁部外反し緑濁色の釉がやや厚くかかり鈍い感じを受ける。胎土は灰色でやや粗い。61もⅢ層出土の石鍋口縁部細片である。

(6) 包含層出土の遺物 (Fig.13・14)

主に調査区北半部のⅢ層(A・BトレンチのⅢ層に対応する層準)から14~15世紀を中心とする遺物が出土している。

① I層出土の遺物 (Fig.13-62~64)

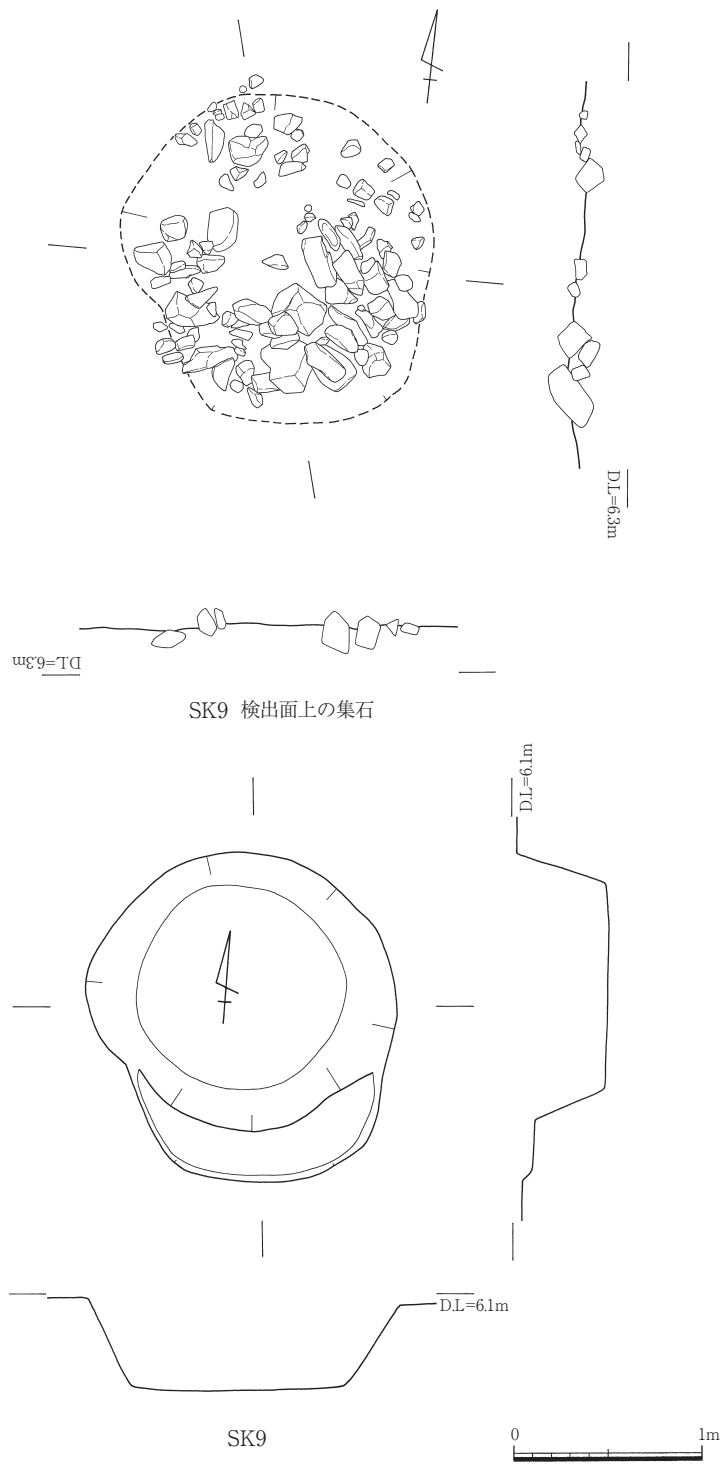
62は、能茶山窯の磁器碗である。上半部を欠損している。高台内に「茶山」銘があり、体部外面は窓内に山水文、見込みには雲が描かれている。63・64は土錘である。

② II層出土の遺物 (Fig.13-65)

65は肥前産陶器の甕である。口縁部上面に貝目痕が認められる。頸部外面は灰釉が施されるが焼成は余り良くない。16世紀末から17世紀前葉に属する。

③ III層出土の遺物 (Fig.13-66~88, Fig.14-89~108)

66~68は土師器小皿、69~72・75は土師器杯である。すべてロクロ成形で底部糸切り痕が見られ



SK9 検出面上の集石

SK9

Fig.11 SK9平面図

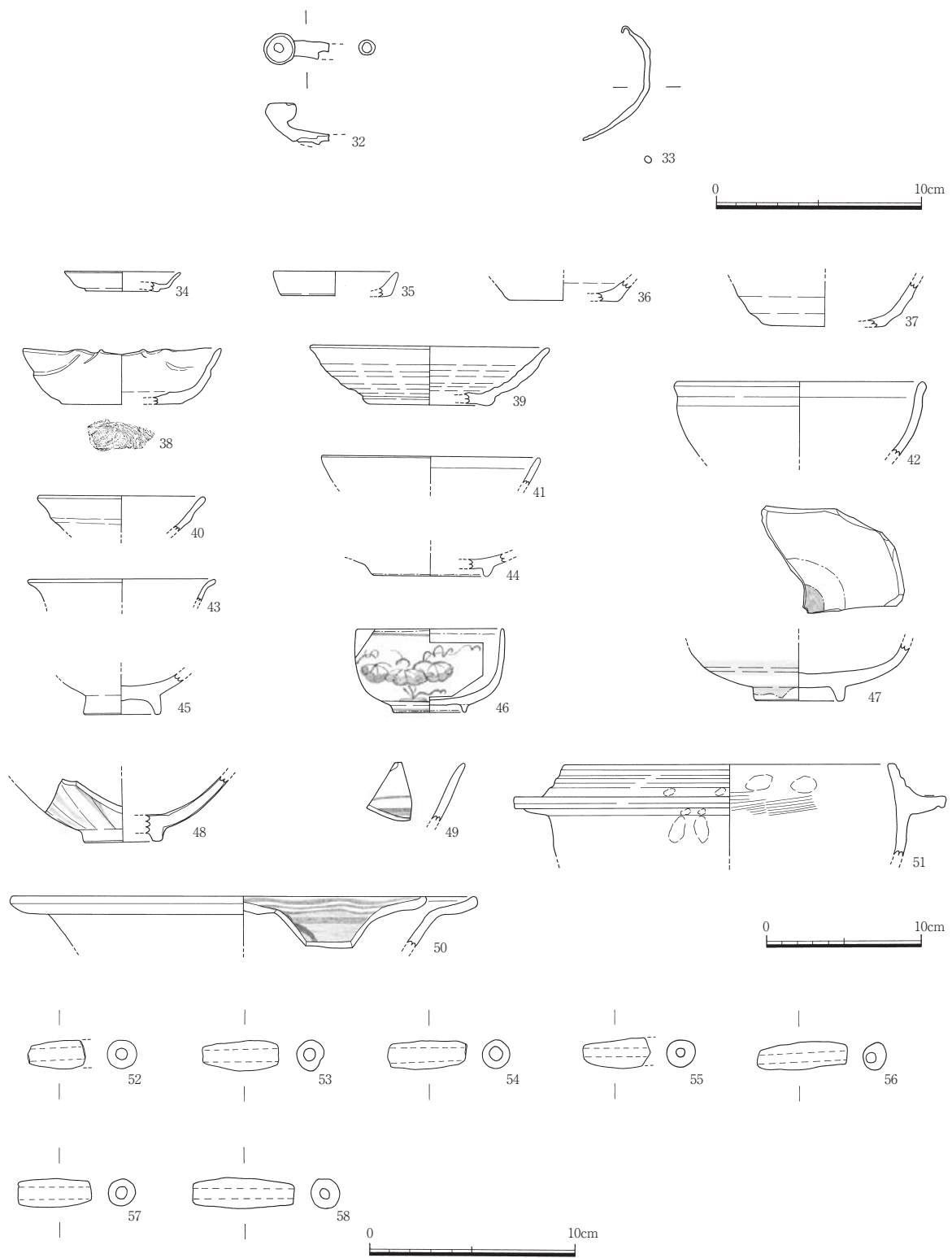


Fig.12 SK5・7、ピット、集石出土遺物

(SK5 : 32、SK7 : 33、P6 : 53、P12 : 51、P14 : 34、P21 : 54・57、P22 : 35、P27 : 52、P29 : 36、P32 : 48、P33 : 42、P38 : 39、
P39 : 49、P41 : 44、P43 : 38、P44 : 37、P50 : 55、P51 : 41・43、P54 : 46、P58 : 56、集石 : 45・47・50・58)

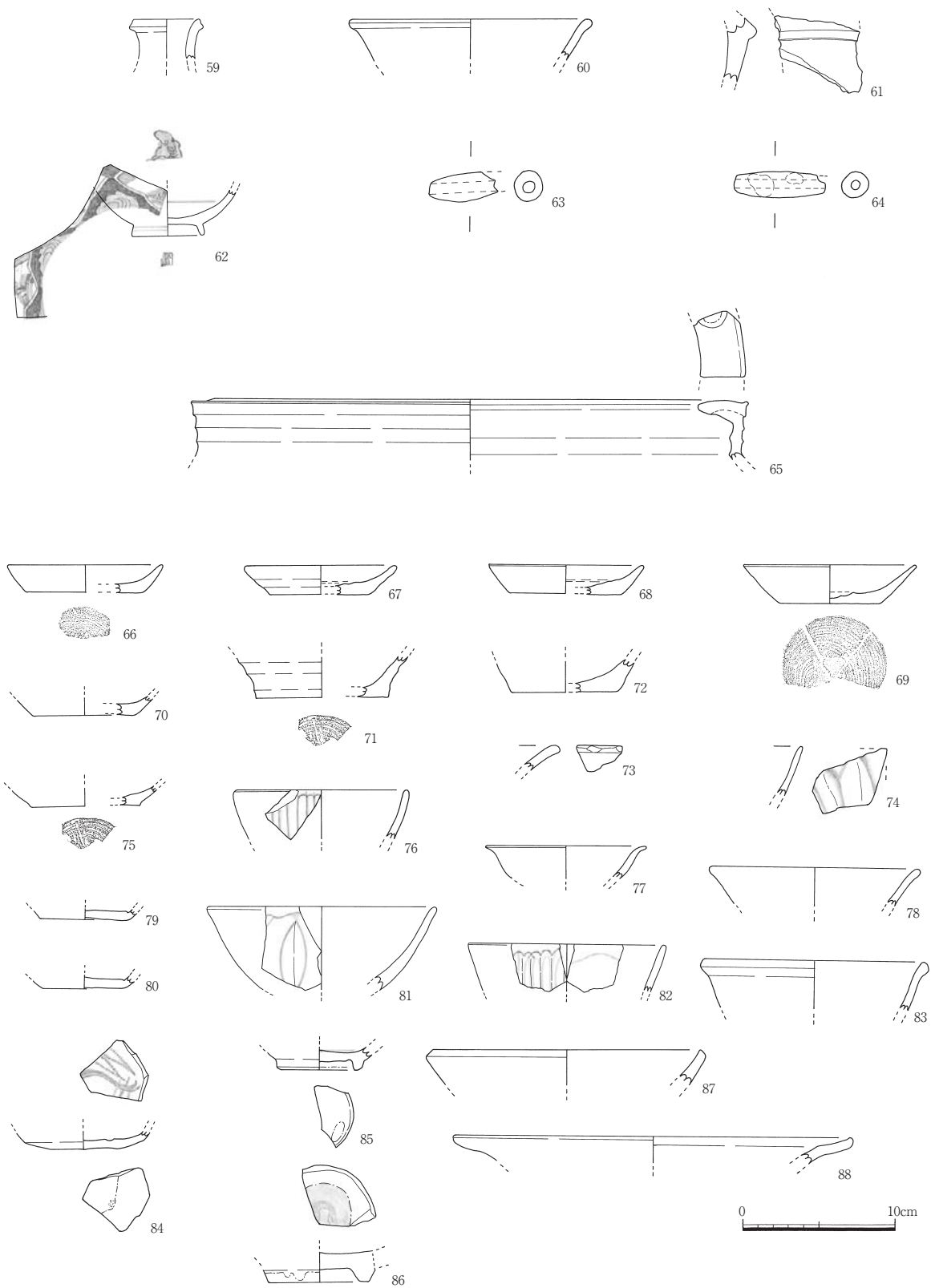


Fig.13 Aトレンチ・包含層Ⅰ～Ⅲ層出土遺物

(Aトレンチ：59～61、Ⅰ層：62～64、Ⅱ層：65、Ⅲ層：66～88)

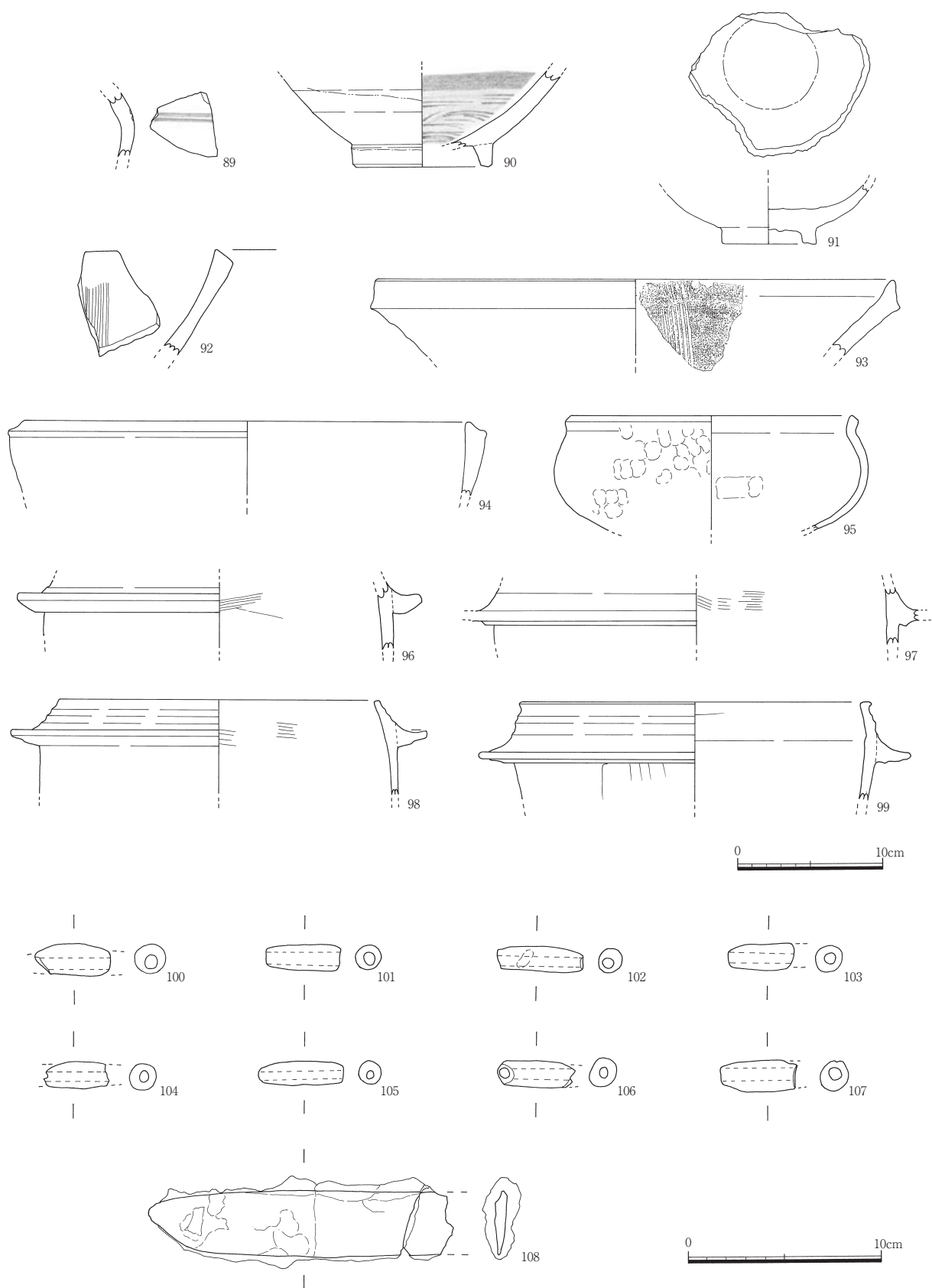


Fig.14 包含層Ⅲ層出土遺物

る。73は青磁稜花皿口縁部、74・76・78・81・83は青磁碗口縁部で、74と81は鑄連弁文、76・82は細連弁文である。78・83は口縁部外反のタイプである。85・86・91は青磁碗底部で、85は赤褐色の粗い胎土を有し広東系青磁碗と考えられる。貫入の入った鉛色の釉で、畳付けまで施釉されている。86は断面台形のしっかりした高台を有し、見込みは蛇目状に釉を掻きとっている。91は見込み全体が輪状に露胎している。高台は方形で大きく釉は高台内面にまで及んでいる。84は同安窯系青磁皿で、口縁部を欠くが体部中位で屈曲し、内面は櫛状原体による3条単位の沈線文と同原体のジグザグ文を施している。79・80は白磁皿底部、口縁部形態は不明であるが口禿口縁のタイプで、両者とも外底にまで施釉されている。87は陶器の鉢か碗の口縁部細片である。88は肥前産唐津系灰釉陶器皿で口縁部が屈曲して外反する。89は古瀬戸灰釉瓶子の肩部片で、2条の沈線を有する。90は肥前系の鉢である。しっかりした台形状の高台を持ち、外面鉄釉、内面底部付近まで化粧土と鉄釉のハケ仕上げである。92・93は備前播鉢、IV期に属するものと考えられる。94は土師器鍋、95は瓦質鍋、96・97は土師器羽釜、98・99は瓦質羽釜である。96・97は褐色、98・99は灰白色の胎土である。両者は形態的にも違いが認められる。すなわち前者は鏝の幅が2cm未満であるのに対して後者は2.5cmと長い、また器壁も前者が後者より厚い。100～107は土錘である。108は調査区西端部で出土した刀である。残存長15.7cm、幅3.4cm、厚さ0.5cmを測る。全面に激しく錆がまわっている。

④ IV層出土の遺物 (Fig.15-109~114)

109は土師器小皿、110は同杯である。111は鑄連弁文を有する青磁碗である。112は土師器鉢であるが、形態的な特徴から東播系捏鉢の模倣と考えられる。113は須恵器甕口縁部細片である。114は粘板岩製の砥石である。

(7) 山際出土の遺物 (Fig.15-115~127、Fig.16・17)

I層出土の遺物であるが、調査区西側の斜面裾部から近世陶磁器がまとまって出土している。調査区内に存在していたと考えられる近世建物から廃棄されたものであろう。

115は肥前産染付け紅皿である。内面に松葉文を施文している。116は肥前産皿、鉄釉を施し内面には白化粧土を波状に塗布している。117は肥前系皿、内面に竹と松が見られる。118は肥前産皿で見込みに唐草文、高台内に「渦福」がある。119~121は肥前波佐見産皿である。119は体部内面花卉文、外面唐草文、見込みにコンニャク印による五弁花、高台内に「渦福」。120は見込みを蛇目状に釉剥ぎ、中にコンニャク印による五弁花。121は体部内面花卉文、見込みにコンニャク印による五弁花、高台内に「渦福」。122・123は肥前系広東形碗である。124~127は肥前産青磁染付碗である。口縁部内面には四方襷、126・127は見込みにコンニャク印による五弁花、高台内に「渦福」。128・129は肥前系杯である。129は内面色絵付けで松と梅が見られる。130は肥前系碗、見込みに「寿」、外面は矢場根文が施される。131は肥前波佐見産クラワンカ手、外面に雪輪草花文。132は肥前系端反形碗、外面に山水を描く。133は肥前産猪口、口縁部内面に四方襷文が見られる。134・136は能茶山産広東形碗で、外面に花卉文を描き、136は高台内に「茶」銘がある。135・137~140・143は肥前系の広東系碗である。141は肥前産陶胎染付けで、白化粧土塗布後に透明釉を施釉、外面に山水文を描いている。142は肥前系の碗で見込みに宝物、蛇目凹形高台を有する。144は肥前産青磁染付蓋である。摘み内に「渦福」、見込みにコンニャク印による五弁花、口縁部内面に四方

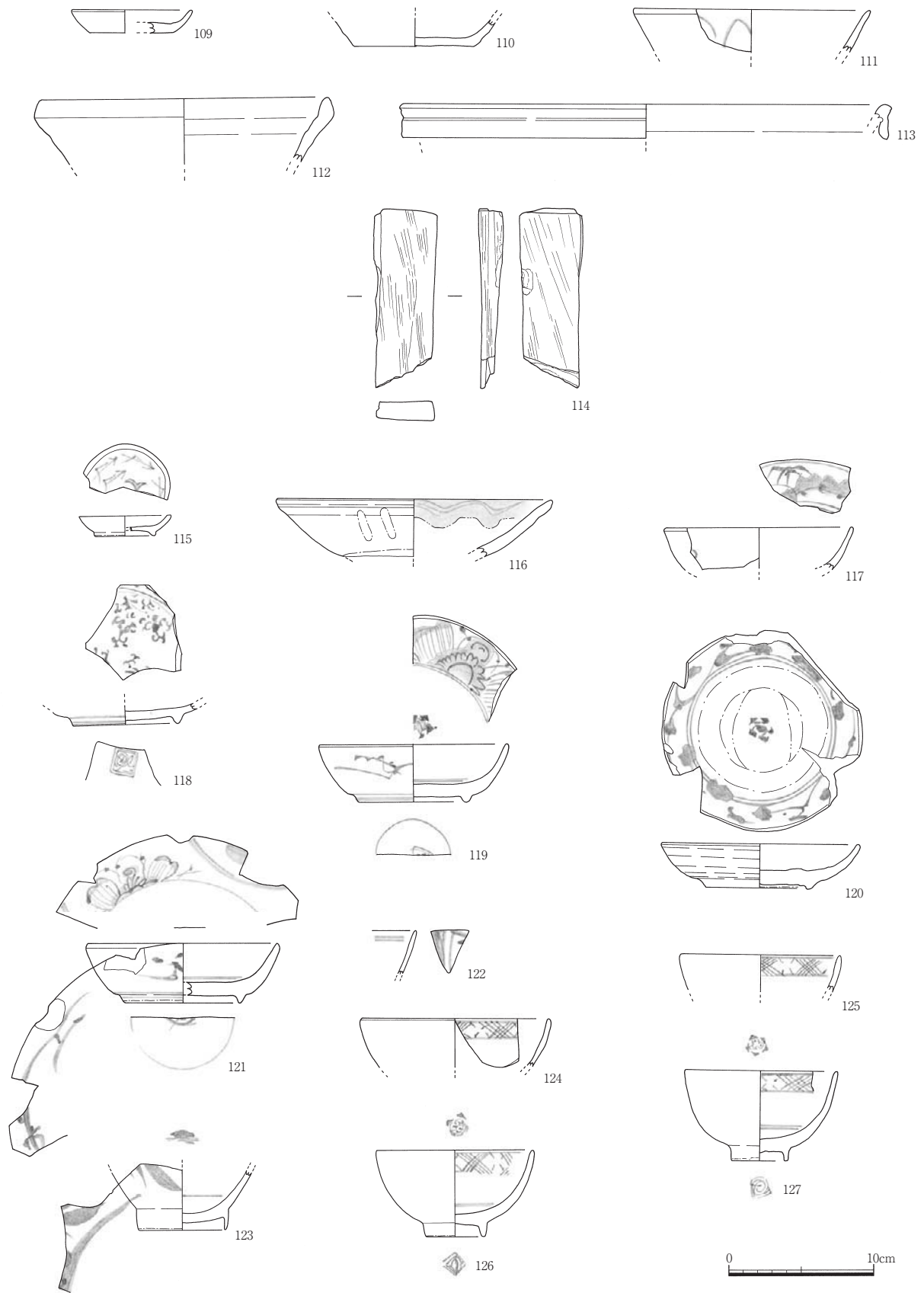


Fig.15 包含層IV層、山際出土遺物 (1)

(IV層：109～114、山際：115～127)

襷文が描かれている。145・149は肥前系の蓋で、後者は外面に柳、見込みに花卉文を描く。146は京都系半球形碗である。上絵付けによる赤・緑の色絵、細かな貫入が見られる。147は肥前系小碗、外面に草と笹を描く。148は肥前産の徳利で、外面は赤の色絵付け。150は肥前産青磁の火入れ香炉である。151は尾戸産の碗、白色を帯びた灰釉が施されている。154は能茶山産の鉄釉碗で、見込みは蛇目釉剥ぎのあと化粧土をハケ塗りしている。152は関西系の甕で内外面鉄釉、部分的に黒色の釉を流しかけしている。155は肥前産鉢、断面長方形のしっかりした高台を有し、体部内外面鉄釉、内底は白化粧土をハケ塗りしている。157は肥前産皿、内面も唐草と宝文を描き、高台内には「大明□□」銘がある。また張り支え痕も認められる。156は播鉢で堺産の可能性はある。

(8) 層位不明の遺物

出土の元位置を確認し得なかった遺物であるが、これらの多くは山際出土のものと考えられる。158は、肥前産紅皿で型押成形によるものである。159は白磁八角小杯である。160は青磁碗底部で見込みにスタンプによる花文が見られる。161は同安窯系青磁皿である。体部中位で屈曲するタイプで、見込みにはヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文を有する。162・164は京都系半球系碗である。赤・緑の色絵付けがされている。163・166は肥前産青磁染付けで、前者は碗、後者は朝顔碗である。両者ともに口縁部内面に四方襷が描かれ、後者は見込みにコンニャク印による五弁花が見られる。165は肥前産輪花皿である。167は肥前系小碗、170は肥前系鉢である。後者は口縁部輪花、鉄釉と化粧土によるハケ仕上げである。169は尾戸窯産の灰釉碗で高台内に「吉キヨ」墨書が見られる。見込みに目跡が三足認められる。168も灰釉碗で尾戸窯産の可能性はある。171～173・175は肥前産鉢である。鉄釉と白化粧土によるハケ仕上げを基調とし173の口縁部上面は無釉である。171・172の高台は断面方形の太いものであるが、175は三角形状を呈する。174は肥前形碗である。釉は焼成不良のため白濁、見込みは蛇目状に釉剥ぎしている。176は肥前産皿で見込みに段を有する。釉は白濁した灰釉で外面下半は露胎、見込みに褐色の粗い砂による砂目が見られる。177は播鉢、178は土師器鍋、179は土師器羽釜である。

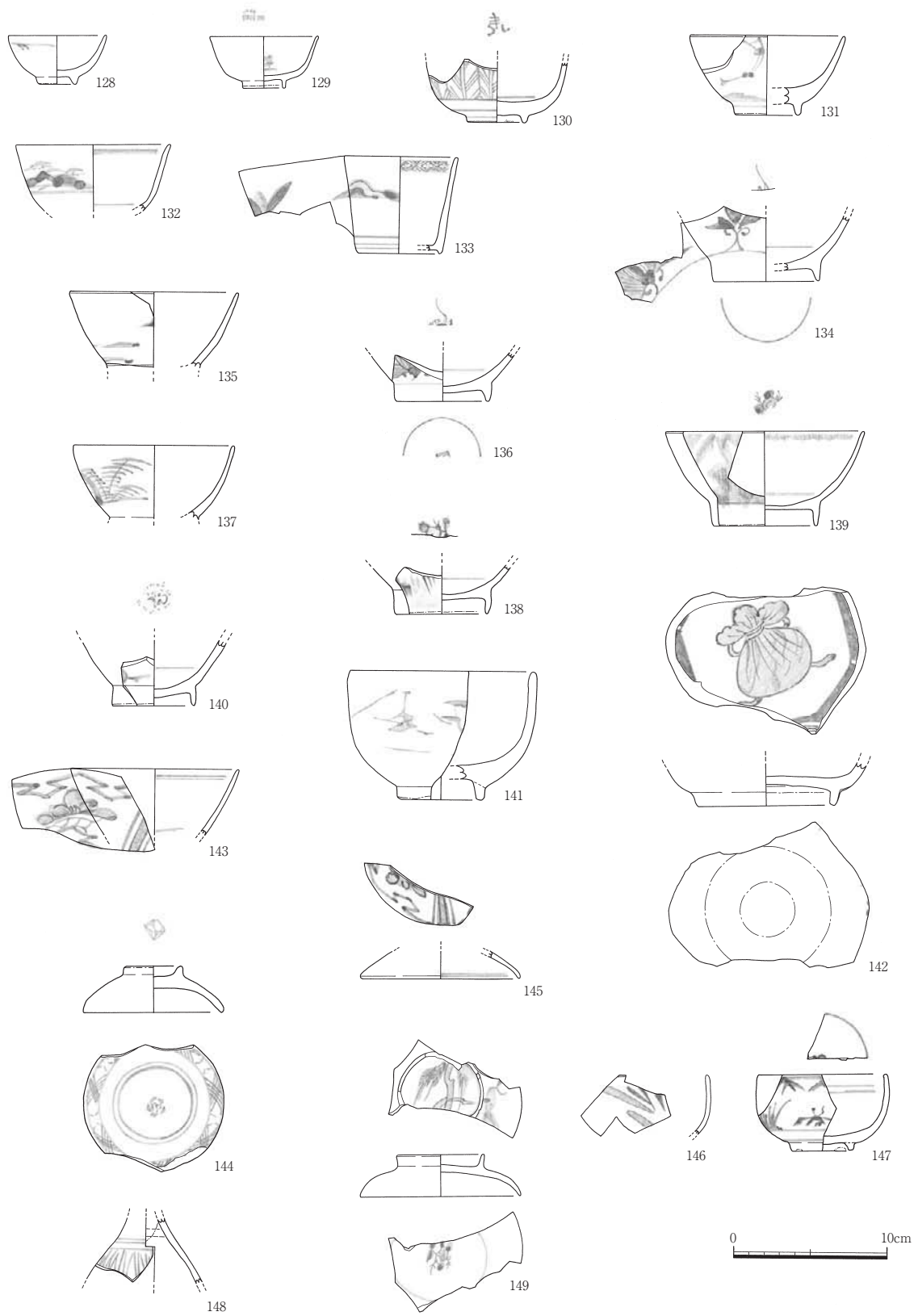


Fig.16 山際出土遺物 (2)

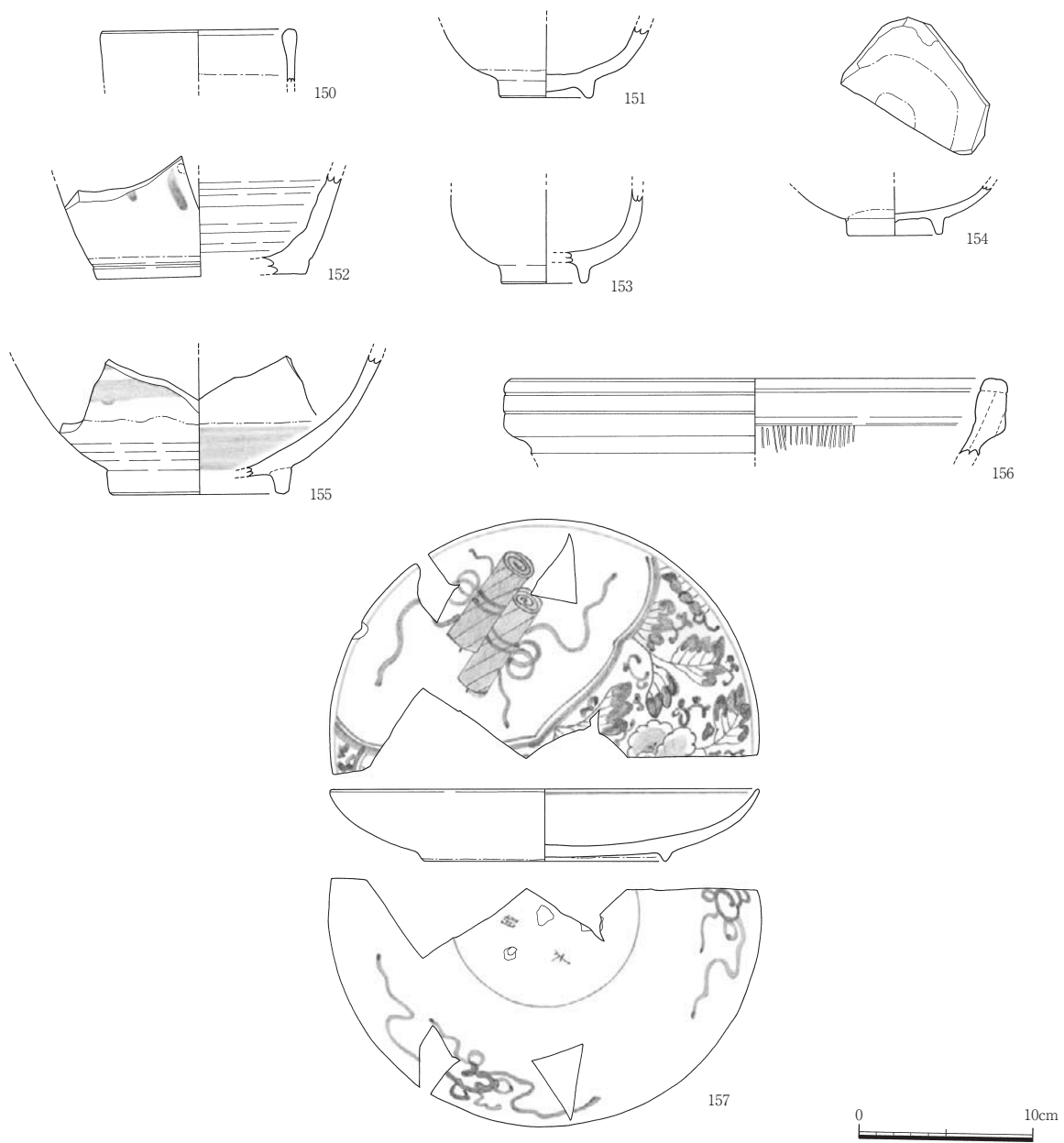


Fig.17 山際出土遺物 (3)

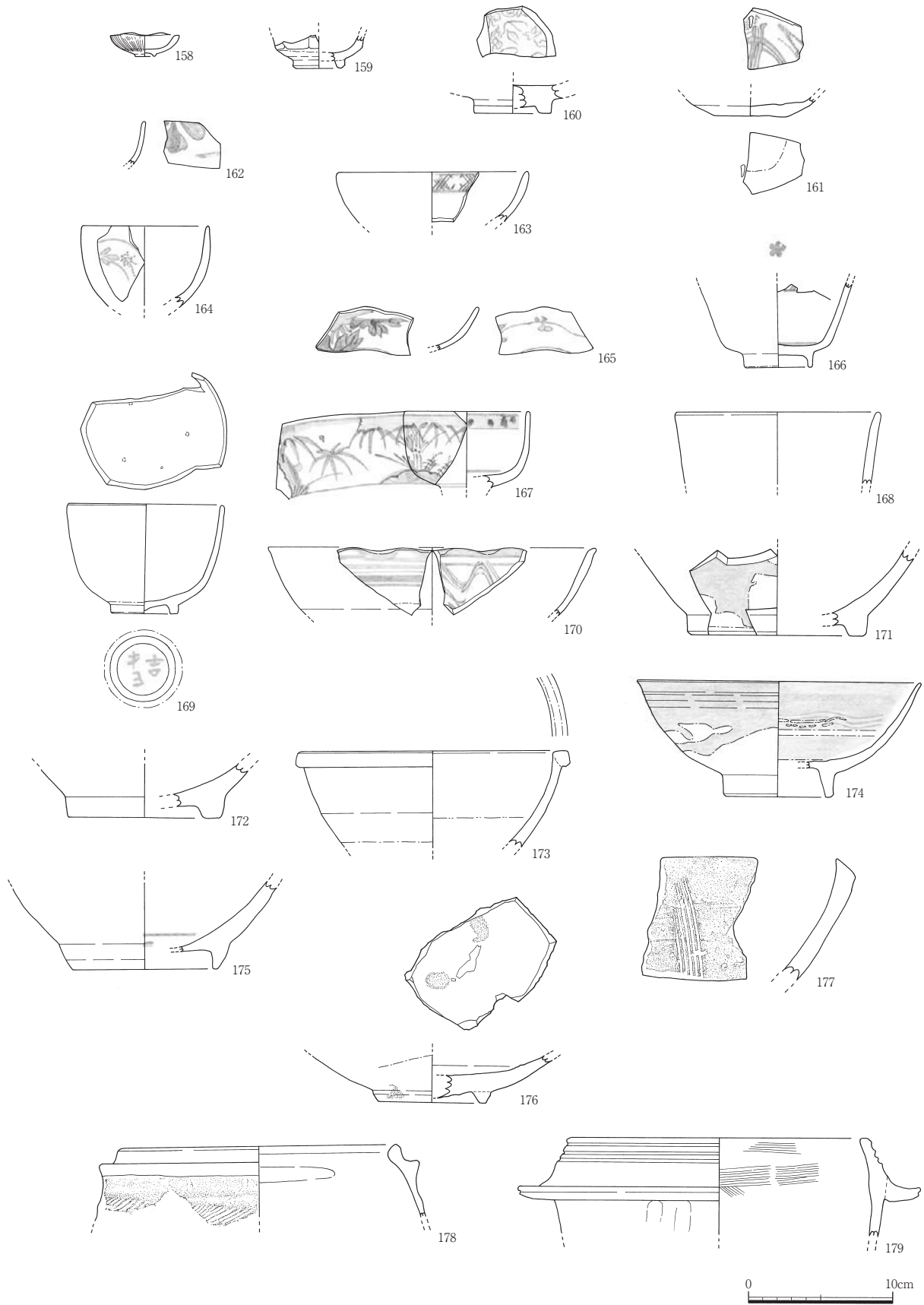


Fig.18 山際出土遺物 (4)、包含層出土遺物

(山際：158、包含層：159～179)

第V章 まとめ

1 遺物

今次調査では、古代から近世にいたる土器、陶磁器類を中心に少量の金属器、銭貨が出土している。ここでは、遺物の多くを占める土器、陶磁器類について時期別に整理し当遺跡の特徴を明らかにしたい。

(1) 古代

9～10世紀の黒色土器A類椀と長胴甕の細片が数点出土している。中土佐町では初めての古代遺物であり、周辺に古代の遺跡の存在が想定されよう。

(2) 中世

微細な破片を除いた遺物組成は表に示した。土師器供膳形態では杯、小皿が柱穴や包含層から出土している。チャート、石英等の砂粒を含むものも見られるが総じて精選された胎土が使われている。成形手法は例外なく回転台成形で糸切り痕をとどめている。煮沸形態では、鍋（94・178）、羽釜（51・96・97・179）が見られる。94は、15世紀代に広く認められる東播系の鍋、178はそれよりも後出する形態である。両者ともに搬入品である。羽釜は2つのタイプが見られる。96・97は鋳端部が丸味を帯びているのに対して51・179は端部が鋭く仕上げられ口縁外面に凹線が施されている。

瓦器椀は和泉型に属し森島編年のⅢ期2～3期¹⁾に比定され、本県で最も多く出土するタイプである。瓦質羽釜98・99は和泉型D1類²⁾、95の瓦質鍋は土佐型³⁾に属するもので両者とも15世紀代に共存する煮沸形態である。この他播鉢が1点（14）見られる。

国内産陶磁器は、備前播鉢（92・93）、東播系須恵器捏鉢（15・17）、古瀬戸（18・59・89）の他、産地不明の播鉢（177）、鉢（87）が見られる。備前播鉢は92が真壁編年Ⅲ期、93はⅣ期に比定できる⁴⁾。東播系須恵器は、15がⅡ期、17がⅢ期に属するものである⁵⁾。古瀬戸59の瓶子は古瀬戸前期、袴腰形香炉は古瀬戸後期に該当する。後者は県下では初めての出土である。

貿易陶磁器は青磁と白磁が見られる。青磁碗は龍泉窯系で占められている。鎚蓮弁を有する太宰府編年I5b類（48・74・81・111）、同I2類（19・25・49）⁶⁾、細蓮弁を有する上田編年⁷⁾BIV類、無文で口縁部が外反する同D類（24・60・78・83）、無文で内湾するE類（41）、この他図示し得なかった細片の中に太宰府編年I5b類が6点見られる。青磁皿は同安窯系と龍泉窯が見られ、前者は太宰府編年I1b（84・161）、後者は稜花皿である。白磁は、図示し得なかったが碗胴部片が1点、他は皿である。79・80は太宰府編年のIX1類、43・44・77は森田勉編年⁸⁾のE群に属するものである。

これらの陶磁器類の他に石鍋（61）が1点見られる。細片であるが口縁部形態から木戸編年のⅣ

坪ノ内遺跡出土の中世土器組成表

種類	土師器	瓦器	貿易陶磁器	備前	古瀬戸	東播系須恵器	瓦質鍋・釜	石鍋	その他	計
点数	279点	20点	66点	31点	5点	6点	12点	1点	2点	422点
%	66.1%	4.7%	15.6%	7.3%	1.2%	1.4%	2.8%	0.2%	0.5%	99.8%

類⁹⁾に属するもので本県出土の石鍋の中では最も後出のタイプである。以上中世の土器・陶磁器類について既存の分類に従って述べた。12世紀代から16世紀初め頃まで連続して遺物を確認することができるが、特に青磁碗 I 5b 類が比較的多くを占めていることから13世紀代に遺物の盛行期を求めることができる。

(3) 近世

遺構からの出土はほとんどなく、山際からの出土が多い。使用中の欠損或は建て替えなどに伴って廃棄されたものと考えられる。17世紀代から19世紀代の肥前系陶磁器を中心に、在地の能茶山焼や京都系の絵付け碗などが出土している。肥前系で特筆すべきものは65の陶器甕である。16世紀末～1630年代に属するもので南四国では初めての出土である。他の肥前産・系陶磁器の流れを見ると最も古く遡るものは、17世紀初頭の陶器灰釉皿（176）、次いで17世紀前葉の灰釉小皿（26）や同皿（88）、17世紀後半から18世紀の前半には鉢（90・155・170～173・175）を挙げることができる。磁器では17世紀末から18世紀に位置付けられる染付け皿（118）が見られる。18世紀代には波佐見産の皿（119～121）、18世紀後半代には内面に襷文を施した碗（124～127・163・166）、次いで1780年代から19世紀中葉に比定される広東形碗が多く見られる。17世紀代は陶器を中心に18世紀以降磁器がまとまって入っていることがわかる。

在地産の陶磁器は、尾戸窯（151・168）や能茶山窯（62・134・136・154など）が見られるが、これらは19世紀代のものが多いと考えられる。134や136の広東茶碗は、肥前製品の模倣で19世紀中葉前後の製品と考えられている。当遺跡におけるこのような近世陶磁器のあり方は、県内の一般的傾向に合致するものである。

ただその中で、上述した肥前甕とともに京都系色絵碗（146・162・164）の出土は注目しておく必要がある。この種の製品の出土遺跡は僅少であり、高知城下の中核である高知城伝下屋敷趾¹⁰⁾と堀を巡らした近世屋敷跡である南国市岩村遺跡¹¹⁾が挙げられるのみであり階層性が現れる遺物として位置つけることができる。

2 大型建物SB1と坪ノ内遺跡の位置付け

SB1は調査区の中央部で検出した梁間3間、桁行5間、面積75㎡を測る大型の総柱建物である。すでに見たように柱穴や掘り方埋土からは、時代幅のある遺物が出土しているがP12の柱抜き取り跡から出土した土師器杯（7）とP14出土の古瀬戸（18）を根拠に15世紀代に比定した。面積が大きだけでなく当該期の建物としては柱掘り方が一回り以上大きなところにも特徴があり、一部には石製の礎板も認められる。現状では、SB1の性格について倉庫として位置付けることが最も相応しいと考える。何れにしてもこの建物の性格をどのように理解するかということは、坪ノ内遺跡の位置付けに直結する重要な問題である。

15世紀前後の掘立柱建物の検出例は、田村遺跡を筆頭に数多く知られており中には床面積50㎡以上を測る大型の例も認められるが、今次SB1のように大規模なものは知られておらず柱掘り方も総じて小振りのものが多い。既存の例はそのほとんどが集落や屋敷を構成するものである。本例は狭隘な谷間に立地するなど既存の例とは性格を異にするものと考えなければならない。時期は少し遡

るが、西部の具同中山遺跡群からは13世紀末から14世紀初に比定できる大型建物が検出されている。梁間4間(9.3m)桁行6間(13.8m)の総柱建物で床面積は120㎡前後を測る。柱穴掘り方は、本例より小振りであるが17個の木製礎板が見られる。具同中山遺跡群の建物については、中筋川に臨む立地などから川津に関連した倉庫、特に歴史的背景をも考慮して「〈荘倉〉的な建物」¹²⁾として位置付けられている。

坪ノ内遺跡の立地については、第Ⅱ章で見たように谷の開口部に位置し現在の久礼湾の汀線から1500m程内陸に入っているが、当時の景観は入江がもっと内陸部に湾入していたことが考えられることから、当遺跡も津関連の性格を付すことが可能であり、そのような地勢的背景の中で物資集積や管理のための倉庫としてSB1を捉えたい。

当地は四面を山と海に囲まれた一種孤立的な環境にあるが鎌倉期から九条家の荘園として文献にも登場し、五輪塔なども多く見られる¹³⁾。今次調査においても狭隘な調査面積にもかかわらず13世紀を中心とした貿易陶磁器が多く出土しており、いわば要港に臨む物資の集積地の一角を当遺跡は占めていたと考えることができよう。そして15世紀代に比定されるSB1は、その最終段階の姿として捉えることができよう。現在調査が進行している西山城や坪ノ内遺跡B区の調査成果をふまえて検討を重ねたい。

(註)

- 1) 尾上 実・森島康雄・近江俊秀「瓦器碗」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社1995年
- 2) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集1983年
- 3) 松田直則「土佐の中世煮沸具について」『四国中世土器研究会資料』1997年
- 4) 真壁忠彦・真壁世霞子「備前焼研究ノート(3)」『倉敷考古館研究集報』第5号1967年
- 5) 前掲1) 森田稔「中世須恵器」
- 6) 横田賢次郎・森田 勉「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978年
- 7) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』NO.2 1982年
- 8) 森田 勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』NO.2 1982年
- 9) 前掲1) 木戸雅寿「石鍋」
- 10) 池澤俊幸 他『高知城伝下屋敷跡』(財)高知県埋蔵文化財センター2002年
- 11) 坂本芳史・武市義浩『岩村地区県営圃場に伴う岩村遺跡群発掘調査概要』南国市教育委員会 1996年
- 12) 筒井三菜「具同中山遺跡群における集落の変遷について」『具同中山遺跡群Ⅳ』(財)高知県埋蔵文化財センター2001年
- 13) 林勇作『中土佐町の文化財』中土佐町教育委員会1996年

觀 察 表

遺物観察表 1

図版番号	出土地点	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土・色調	特徴	備考
Fig.7-1	SB1-P19	土師器小皿	8.4	1.2	6.4	精選された胎土。に ぶい橙色	内外面横ナデ、糸切り	
〃 -2	〃 -P7	〃	6.4	1.3	4.4	石英、長石粒を含む。 橙色	〃	
〃 -3	〃 -P3	土師器杯	-	-	-	チャート他の砂粒を 多く含む。	糸切り	
〃 -4	〃 -P6 床	〃	-	-	7.3	精選された胎土、赤 色粒子を含む。橙色	内外面摩擦が激しい	
〃 -5	〃 -P2	〃	-	-	5.4	石英、長石、赤色粒 を含む。橙色	糸切り	
〃 -6	〃 -P3	〃	-	-	6.4	石英、チャート、長 石粒を含む。淡灰色	〃	
〃 -7	〃 -P12 床直上	〃	13.0	2.8	9.0	長石、石英粒を含む。 茶褐色	内外面横ナデ、糸切り。	
〃 -8	〃 -P8	〃	15.0	-	-	精選された胎土。	内外面横ナデ。	
〃 -9	〃 -P18 柱根床	瓦器碗	15.2	-	-	精選された胎土。灰 色	口縁部内外強い横ナデ、体部外面指頭 圧痕顕著、内面横方向の暗文。	
〃 -10	〃	〃	14.6	-	-	石英細粒砂を多く含 む。	口縁部内外面横ナデ、体部外面指頭圧 痕+ナデ、摩擦が激しい。	
〃 -11	〃 -P18 掘方	土師器碗	-	-	7.0	精選された胎土。に ぶい橙色	断面三角の小さな高台。	
〃 -12	〃 -P14 柱根	瓦器碗	14.8	-	-	精選された胎土。灰 色	口縁内外横ナデ。	
〃 -13	〃 -P18 柱根床	〃	-	-	2.6	精選された胎土。	内面に暗文、外面やや粗いナデ。小さ な三角形高台貼付。	9と同一個体と 思われる
〃 -14	〃 -P22 掘方	瓦質擂鉢	-	-	-	精選された胎土。灰 色	口唇部凹状、外面に指頭圧痕。	
〃 -15	〃 -P14	東播系捏鉢	-	-	-	砂粒を含む。	内外面ヨコナデ。	
〃 -16	〃 -P5	青磁碗	-	-	10.0	白色精緻	畳付け露胎。	
〃 -17	〃 -P4	東播系捏鉢	15.0	-	-	石英その他の細粗粒 砂を含む。灰色	内外面横ナデ。	
〃 -18	〃 -P14	古瀬戸香炉	8.1	2.4	7.3	灰色精緻	口縁と体部外面に灰釉、底部糸切り後 に瘤状の高台を2つまで確認できる。	
〃 -19	〃 -P18 床	青磁碗	-	-	-	灰色精緻	内面櫛目、片彫りによる文様、釉は鉛 色で貫入あり、薄くかかる。	
〃 -20	〃 -P15	土錘	長さ 3.3	径 1.6	重さ 4.6g	精選された胎土。橙 色	孔径0.6cm	
〃 -21	〃 -P21	〃	長さ 3.9	径 1.5	重さ 6.1g	精選された胎土。赤 褐色	孔径0.6cm	
〃 -22	〃 -P16	〃	長さ 4.3	径 1.3	重さ 9.3g	〃	孔径0.5cm	
〃 -23	〃 -P6	〃	長さ 4.3	径 1.6	重さ 7.0g	精選された胎土。黄 褐色	孔径0.8cm	
Fig.10-24	SK1	青磁碗	17.0	-	-	灰色粗い胎土。	口縁部外反。	
〃 -25	SK2	〃	-	-	5.8	灰茶色やや粗い	外底は釉をかきとっている。	
〃 -26	SK8 床	陶器皿	13.8	-	-	灰色精緻	灰釉小皿。	肥前産17世紀前 葉
〃 -27	〃	陶器 鉢	-	-	6.2	やや粗い胎土。	灰釉、外面下半無釉、高台内面はアー チ状に削り出す。	肥前産
Fig.12-34	P14	土師器小皿	8.4	1.3	4.7	精選された胎土、赤 色粒を含む。にぶい 橙色	糸切り。	
〃 -35	P22	〃	8.0	1.6	7.1	小礫を含む。	摩擦が激しい。	
〃 -36	P29	土師器杯	-	-	7.1	精選された胎土、赤 色粒を含む。浅黄橙 色	〃	
〃 -37	P44	〃	-	-	8.0	精選された胎土。に ぶい黄橙色	ナデ調整。	
〃 -38	P43	〃	13.0	3.6	8.0	精選された胎土。赤 色粒を含む。浅黄橙 色	歪な仕上がり、糸切り。	

図版番号	出土地点	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土・色調	特徴	備考
Fig.12-39	P38	土師器杯	15.3	3.8	8.0	砂粒を含む。橙色	内外面にロクロ成形痕が顕著	
〃 -40	P61	瓦器碗	10.8	-	-	精選された胎土。灰色	口縁部内外面横ナデ調整。	
〃 -41	P51	青磁碗	14.0	-	-	灰色やや粗い胎土。	釉は濁った薄緑色。	
〃 -42	P33	陶器碗	16.0	-	-	緻密な胎土。	白色透明の釉、粗い貫入が入る。	
〃 -43	P51	白磁皿	12.0	-	-	白色精緻。	口縁部外反。	
〃 -44	P41	〃	-	-	高台径 7.4	〃	畳付けのみ露胎。	
〃 -45	集石2	陶器碗	-	-	高台径 4.9	黄白色のやや粗い胎土。	細かな貫入。	肥前産灰釉丸碗 17C後半～18C 前半
〃 -46	P54	磁器蓋物身	9.6	5.4	高台径 4.8	白色精緻。	口縁部外面、高台脇・高台外面に界線、 体部外面に植物を描く、口縁部内面露胎。	肥前系19C
〃 -47	集石2	陶器皿	-	-	高台径 5.6	やや粗い胎土。	緑釉、淡い緑に発色。内底蛇の目状に 釉を削る。	肥前産18C前半
〃 -48	P32	青磁碗	-	-	高台径 5.1	灰色精緻。	外面鎬連弁、釉は薄緑色、畳付けの一部 にまで施釉。	
〃 -49	P39	〃	-	-	-	〃	飴色に発色、貫入あり、内面に文様。	
〃 -50	集石2	陶器皿	30.0	-	-	褐色でやや粗い胎土。	折縁皿、二彩手、白化粧土ハケ目。	肥前産18C前半
〃 -51	P12	土師器羽釜	21.4	-	-	石英、長石粒を含む。	口縁部外面3条の凹線、横ナデ。鏝幅 2.5cm上下横ナデ、体部外面削り、内 面横ハケ+ナデ。口縁部外面激しく煤 ける。	
〃 -52	P27	土錘	長さ -	径 1.4	重さ 3.5g	精選された胎土。	孔径0.6cm	
〃 -53	P6	〃	長さ 3.8	径 1.5	重さ 5.3g	〃	孔径0.6cm	
〃 -54	P21	〃	長さ 3.7	径 1.4	重さ 4.5g	〃	孔径0.7cm	
〃 -55	P50	〃	長さ -	径 1.4	重さ 5.1g	〃	孔径0.4cm	
〃 -56	P58	〃	長さ 4.3	径 1.4	重さ 5.0g	〃	孔径0.5cm	
〃 -57	P21	〃	長さ 3.6	径 1.3	重さ 4.8g	〃	孔径0.6cm	
〃 -58	集石1	〃	長さ 4.9	径 1.5	重さ 7.1g	赤色風化礫の砂粒を 多く含む。	孔径0.5cm	
Fig.13-59	Aトレンチ VI層	古瀬戸瓶子	4.2	-	-	灰色精緻。	口唇部凹状、薄緑色の釉。	
〃 -60	Aトレンチ	青磁碗	15.7	-	-	白色やや粗い胎土。	濁った薄緑色の釉。	
〃 -61	Aトレンチ III層	石鍋	-	-	-	暗灰色	口縁部は外傾する面をなし段を有する。	滑石製
〃 -62	I層	磁器碗	-	-	高台径 4.5	白色精緻。	「茶山」銘あり、見込みに1条、高台脇 に2条の界線、見込みに雲、窓内に山 水文。	能茶山焼1830年 代～19C中葉
〃 -63	〃	土錘	長さ -	径 1.5	重さ 4.8g	精選された胎土。	孔径0.5cm。	
〃 -64	〃	〃	4.5	1.2	5.2	〃	孔径0.4cm	
〃 -65	II層	陶器甕	36.8	-	-	赤褐色のやや粗い胎土。	口縁端面露胎、頸部外面灰釉焼成不良、 口縁上面に貝目痕。	肥前産16C末～ 1630年代
〃 -66	III層	土師器小皿	10.2	1.8	7.4	精選された胎土。赤 色粒子を含む。	糸切り。	
〃 -67	〃	〃	9.8	1.9	6.4	精選された胎土。	〃	
〃 -68	〃	〃	10.2	1.9	7.2	精選された胎土。赤 色粒子を含む。	摩耗が激しい。	
〃 -69	〃	土師器杯	11.3	2.6	6.6	精選された胎土。	糸切り。	
〃 -70	〃	〃	-	-	6.6	精選された胎土。赤 色粒子を含む。	〃	
〃 -71	〃	〃	-	-	8.8	精選された胎土。	〃	

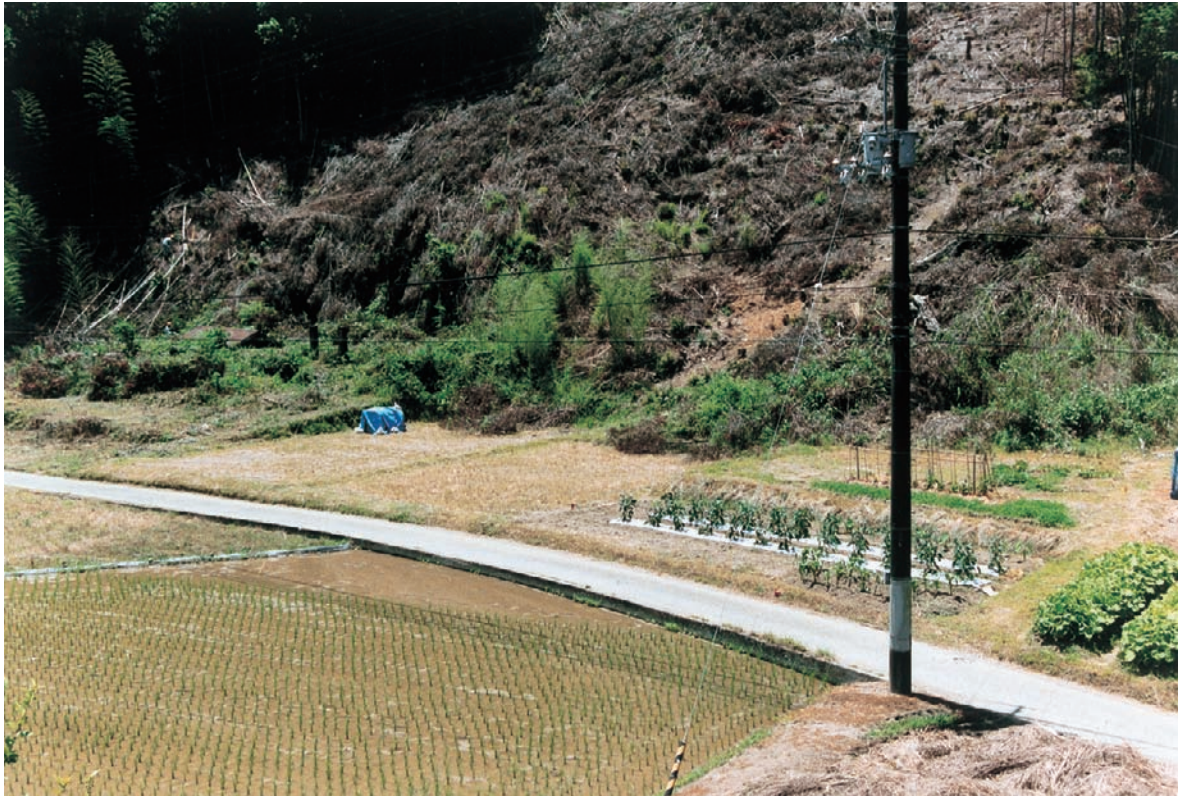
図版番号	出土地点	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土・色調	特徴	備考
Fig.13-72	III層	土師器杯	-	-	7.0	精選された胎土。	摩耗が激しい。	
〃 -73	〃	青磁皿	-	-	-	灰白色のやや粗い胎土。	稜花皿、薄緑色の釉。	
〃 -74	〃	青磁碗	-	-	-	灰色精緻。	外面に鎬連弁文。	
〃 -75	〃	土師器杯	-	-	7.2	赤色風化礫の細粒を含む。	糸切り。	
〃 -76	〃	青磁碗	11.4	-	-	白色精緻。	外面に細連弁文、丸ノミ状工具による施文。	
〃 -77	〃	白磁小皿	10.6	-	-	白色精緻。	口縁部外反。	
〃 -78	〃	青磁碗	13.6	-	-	灰色精緻。	釉は濁緑色。	
〃 -79	〃	白磁皿	-	-	5.8	白色やや粗い胎土。	口禿タイプ。	
〃 -80	〃	〃	-	-	5.4	〃	〃	
〃 -81	〃	青磁碗	15.0	-	-	灰褐色精緻な胎土。	外面に鎬連弁文。	
〃 -82	〃	〃	13.0	-	-	灰色粗い胎土。	外面に細連弁文、丸ノミ状工具による施文。	
〃 -83	〃	〃	14.6	-	-	灰色やや粗い胎土。	濁緑色の釉、口縁外反。	
〃 -84	〃	青磁皿	-	-	4.5	灰色精緻。	透明度のある灰緑色の釉、外底露胎、内底櫛描文。	
〃 -85	〃	青磁碗	-	-	高台径 5.2	赤褐色粗い胎土。	貫入の入った鉛色の釉、畳付けまで施釉外底露胎。	広東系青磁碗
〃 -86	〃	〃	-	-	6.6	淡褐色のやや粗い胎土。	見込みは蛇の目状に釉を掻きとる。	
〃 -87	〃	備前碗	17.6	-	-	精選された胎土。	内外横ナデ。	
〃 -88	〃	陶器皿	26.2	-	-	灰褐色の粗い胎土。	灰釉、薄緑色の釉。	肥前産唐津系17C前葉
Fig.14-89	〃	古瀬戸瓶子	-	-	-	灰色のやや粗い胎土。	肩部に2条の沈線、透明度のある薄緑の釉。	
〃 -90	〃	陶器鉢	-	-	高台径 9.2	黄色の粗い胎土、砂粒を多く含む。	断面台形のしっかりした高台、外面削り。外面鉄釉、内面底部付近は化粧土と鉄釉のハケ仕上げ。高台内外面露胎。	肥前系17C後半～18C第1四半期
〃 -91	〃	青磁碗	-	-	高台径 6.5	灰色やや粗い胎土。	黄緑色の釉。見込み露胎、外面は畳付け、外底にも施釉。	
〃 -92	〃	備前播鉢	-	-	-	砂粒を含む、暗褐色に発色。	内外横ナデ、内面に条線。	
〃 -93	〃	〃	25.5	-	-	〃	内外横ナデ、内面に条線。	
〃 -94	〃	土師器鍋	30.6	-	-	石英、長石、雲母、角閃石を含む。	口唇部凹状。	
〃 -95	〃	瓦質鍋	19.6	胴径 21.8	-	精選された胎土。	口縁部内外横ナデ、口唇部面取り、体部外面指頭圧痕顕著。	外面激しく煤ける
〃 -96	〃	土師器羽釜	-	-	-	石英その他の砂粒を多く含む。	鑄幅2cm、外面削り。	〃
〃 -97	〃	〃	-	-	-	〃	鑄上下横ナデ、胴部外面削り、内面横ハケ。	
〃 -98	〃	瓦質羽釜	22.2	胴径 24.8	-	石英、チャートの細粒砂多く含む。	内湾する口縁部外面に3条の凹線文、鑄幅2cm。胴部外面削り、内面横ハケ。	外面煤ける
〃 -99	〃	〃	24.4	胴径 24.3	-	精選された胎土、チャート他の粗粒。	鑄幅2.5cm、口縁部外面に3条の凹線。体部外面横方向の削り、内面は丁寧な横ナデ。	
〃 -100	〃	土錘	長さ -	径 1.6	重さ 8.1g	橙色、赤色細粒を多く含む。	孔径0.7cm	
〃 -101	〃	〃	長さ 3.8	径 1.3	重さ 5.1g	〃	孔径0.7cm	
〃 -102	〃	〃	長さ 4.4	径 1.2	重さ 5.2g	〃	孔径0.5cm	
〃 -103	〃	〃	長さ -	径 1.4	重さ 4.0g	〃	〃	
〃 -104	〃	〃	長さ -	径 1.4	重さ 4.6g	〃	〃	
〃 -105	〃	〃	長さ 4.4	径 1.2	重さ 5.4g	にぶい橙色、赤色粒を含む。	孔径0.4cm	

図版番号	出土地点	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土・色調	特徴	備考
Fig.14-106	Ⅲ層	土鐘	長さ -	径 1.5	重さ -	橙色、精選された胎土。	孔径0.5cm	
〃 -107	〃	〃	長さ -	径 1.6	重さ -	橙色、赤色細粒を多く含む。	孔径0.6cm	
Fig.15-109	Ⅳ層	土師器小皿	9.2	1.6	6.8	橙色、精選された胎土赤色粒を含む。	横ナデ	
〃 -110	Ⅳ層	土師器杯	-	-	8.4	橙色、赤色風化礫を多く含む。	横ナデ。	
〃 -111	〃	青磁碗	16.4	-	-	灰色精緻。	濁緑色の釉、鎬連弁文。	
〃 -112	〃	土師器捏鉢	20.0	-	-	チャート他の粗粒砂多く含む。	東播系捏鉢模倣か。	
〃 -113	〃	須恵質甕	31.6	-	-	石英細粗粒を多く含む。	口縁部が大きく下垂。	
〃 -115	山際	磁器皿	6.4	1.4	4.2	白色精緻。	染付け紅皿、内面松葉文。	肥前産
〃 -116	〃	陶器皿	19.0	-	-	赤褐色粗い胎土。	体部内外面鉄釉、内面上部白化粧土をハケ塗り。	肥前産18C
〃 -117	〃	磁器皿	13.0	-	-	白色精緻。	染付け、内面松と竹。	肥前系
〃 -118	〃	〃	-	-	高台径 7.2	〃	染付け、内面唐草、高台内渦福。	肥前産17C末～18C焼成不良
〃 -119	〃	〃	13.0	4.0	高台径 7.6	〃	内面花卉、外面唐草、高台内渦福、見込みコンニャク印による五弁花。	肥前波佐見産18C
〃 -120	〃	〃	13.6	3.1	高台径 7.2	〃	内面は蛇の目状に釉剥ぎ、内面草花文、見込みにコンニャク印による五弁花。	〃
〃 -121	〃	〃	13.2	4.1	高台径 8.0	〃	内底2条の界線、見込みにコンニャク印による五弁花。花卉文。	〃
〃 -122	〃	磁器碗	-	-	-	白色やや粗い胎土	口縁部内面に2条の界線、外面文様不明。	肥前系広東形碗
〃 -123	〃	〃	-	-	高台径 6.0	白色精緻。	見込みに界線、岩波文。	広東系1780年代～19C中葉
〃 -124	〃	〃	13.0	-	-	〃	青磁染付け、四方襷。	肥前産18C後半
〃 -125	〃	〃	11.0	-	-	〃	〃	〃
〃 -126	〃	〃	10.8	6.0	高台径 4.0	〃	口縁部内面四方襷、見込み五弁花、高台内渦福。	〃
〃 -127	〃	〃	12.6	6.2	高台径 4.0	灰色精緻。	〃	〃
Fig.16-128	〃	磁器杯	6.4	3.2	高台径 2.4	白色やや粗い胎土	篋文。	肥前系19C
〃 -129	〃	〃	7.0	3.4	高台径 2.8	〃	色絵小杯、内面絵付け、松と梅。	19C
〃 -130	〃	磁器碗	-	-	高台径 3.6	〃	見込みに界線、中央に「寿」。外面矢羽文。	肥前系19C
〃 -131	〃	〃	10.0	5.2	高台径 4.2	灰白色精緻。	雪輪草花文。	肥前波佐見産18C
〃 -132	〃	〃	10.0	-	-	白色精緻。	端反形碗、内面界線、外面山水文。	19C中葉
〃 -133	〃	磁器猪口	7.4	6.3	5.3	〃	口縁部内面四方襷、外面草文。	肥前産
〃 -134	〃	磁器碗	-	-	高台径 7.0	白色やや粗い胎土	広東形、高台内外と見込みに1条の界線。外面花卉文。	能茶山産1830年代～19C中葉
〃 -135	〃	〃	11.0	-	-	〃	広東形、外面山水。	肥前系1780年代～19C中葉
〃 -136	〃	〃	-	-	高台径 6.0	〃	広東形、外面花卉文、高台内「茶」銘。	能茶山産1830年代～19C中葉
〃 -137	〃	〃	10.4	-	-	〃	広東形、貫入あり。外面草文	肥前系1780年代～19C中葉
〃 -138	〃	〃	-	-	高台径 6.0	白色精緻。	広東形。	〃
〃 -139	〃	〃	13.0	6.2	高台径 6.6	〃	広東形、吾須が滲む。	〃
〃 -140	〃	〃	-	-	高台径 5.4	〃	広東形。	〃
〃 -141	〃	陶器碗	11.9	8.4	高台径 5.7	灰色やや粗い	陶胎染付け。畳付け以外白色化粧土施文後透明釉、山水文。	肥前産18C後半

図版番号	出土地点	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土・色調	特徴	備考
Fig.16-142	山際	磁器碗	-	-	高台径 9.0	白色精緻。	見込み宝文、蛇の目凹状高台	肥前系18C後半 ～19C中葉
〃 -143	〃	〃	11.0	-	-	〃	広東形、口縁部内面2条界線、外面松文。	肥前系1780年代 ～19C中葉
〃 -144	IV層	磁器蓋	9.0	3.0	摘み径 3.6	〃	青磁染付け、摘み内面渦福、見込みに五弁花、口縁部内面四方禰。	肥前産17C～18C
〃 -145	〃	〃	10.4	-	-	白色やや粗い胎土。		19C
〃 -146	〃	陶器碗	-	-	-	黄白色のやや粗い胎土。	京都系半球形碗、上絵付けによる色絵(赤、緑)、細かな貫入。	18C後葉
〃 -147	〃	磁器碗	8.6	5.0	高台径 4.0	白色精緻。	外面草と笹文。	肥前形
〃 -148	〃	磁器徳利	-	-	-	〃	外面色絵(赤)。	肥前産
〃 -149	〃	磁器蓋	10.4	2.7	摘み径 5.4	〃	見込み花文。	肥前系
Fig.17-150	〃	青磁香炉	11.0	-	-	〃	口縁部内側に肥厚。	肥前産
〃 -151	〃	陶器碗	-	-	高台径 6.2	淡黄色褐色やや粗い。	高台内外面削り(右→左)、内面及び体部外面上部白色を帯びた灰釉	尾戸産
〃 -152	〃	磁器甕	-	-	6.0	白色やや粗い胎土。	内外面鉄釉、部分的に黒色の釉を流し掛け。	関西系19C
〃 -153	〃	陶器碗	-	-	高台径 4.8	灰白色でやや粗い胎土。	肥前系灰釉丸碗、オリーブ灰色を帯びた半透明の釉、畳付け以外全面施釉、貫入。	地元産の可能性あり
〃 -154	〃	〃	-	-	高台径 5.4	赤褐色細かな胎土。	断面逆台形状の高台、鉄釉、見込みは蛇の目状に釉剥ぎ+化粧土ハケ塗り。	能茶山産 19C
〃 -155	〃	陶器鉢	-	-	高台径 10.2	赤彩褐色やや粗い。	断面長方形のしっかりした高台。内外面鉄釉、内面底部は白色化粧土、ハケ塗り。	肥前系17C後半 ～18C第1四半期
〃 -156	〃	陶器播鉢	29.0	-	-	赤褐色に発色砂粒を多く含む。	口縁部内面に2条の凹線、内面1条の沈線。	堺明石系19世紀
〃 -157	〃	磁器皿	24.6	4.2	高台径 14.0	白色精緻。	染付け、内面は宝文と牡丹唐草と宝文、高台径内に「大明□□」の銘あり。外底にハリ支え痕。	肥前産17C後葉 ～18C前葉
〃 -158	山際	〃	4.8	1.5	高台径 1.5	〃	紅皿、型押成形。	肥前産18C末～ 19C中葉
〃 -159	包含層	白磁杯	-	-	高台径 3.6	〃	八角杯。	
〃 -160	〃	青磁杯	-	-	高台径 5.2	灰白色精緻。	断面長方形の高台、内面刻花。	
〃 -161	〃	青磁皿	-	-	高台径 5.0	灰色精緻。	透明度のある灰緑色の釉、内面襷描。	同安葉
〃 -162	〃	陶器碗	-	-	-	黄白色の胎土。	京都系半球形碗、色絵(緑・赤)上絵付け。	18C後半
〃 -163	〃	磁器碗	13.0	-	-	白色精緻。	青磁染付、内面四方禰。	肥前系18C後半
〃 -164	〃	陶器碗	8.8	-	-	黄褐色の胎土。	京都系半球形碗、上絵付け(赤、緑)、粗い貫入。	18C後半
〃 -165	〃	磁器碗	-	-	-	白色精緻。	輪花形、内面草花文。	肥前産
〃 -166	〃	〃	-	-	高台径 4.6	〃	青磁染付朝顔形、見込みにコンニャク印による五弁花、口縁部内面四方禰。	肥前産18C後半
〃 -167	〃	磁器小碗	8.8	-	-	〃	外面竹文。	19C
〃 -168	〃	陶器碗	14.0	-	-	白色やや粗い胎土	灰白色半透明の灰釉。	尾戸窯
〃 -169	〃	〃	10.6	7.6	高台径 4.5	灰色精緻。	緑色を帯びる半透明の灰釉、高台脇まで施釉。外底に兜幅、外底に「吉キヨ」の墨書あり。見込みに目あと3足。	
〃 -170	〃	陶器鉢	22.6	-	-	赤色やや粗い胎土。	口縁輪花、内面と外面上半分に施釉、鉄釉と化粧土によるハケ仕上げ。	肥前系17C後半 ～18C前半
〃 -171	〃	〃	-	-	高台径 12.0	〃	方形のしっかりした高台、内外鉄釉と化粧土によるハケ塗り。内面著しく摩耗。	肥前産17C後半 ～18C第1四半期
〃 -172	〃	〃	-	-	高台径 10.6	〃	〃	〃
〃 -173	〃	〃	18.8	-	-	褐色やや粗い胎土	内外面鉄釉、外面と内面下半は白化粧土を部分的に薄くハケ塗り。	肥前産18C

図版番号	出土地点	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土・色調	特徴	備考
Fig.17-174	包含層	陶器碗	19.6	8.0	高台径 7.2	赤褐色精緻。	見込みは段状をなし釉を蛇の目状に剥ぎ取る。釉は焼成不良により白濁。	肥前系
〃 -175	〃	陶器鉢	-	-	高台径 10.0	赤褐色精緻。	断面三角形高台。体部内外面鉄釉、白化粧土ハケ塗り、高台内面外底削り。	肥前産18C 第2四半期～後半
〃 -176	〃	陶器皿	-	-	高台径 7.5	暗褐色やや粗い胎土。	見込みに僅かな段、断面逆三角形の高台。内面と外面上半分に白濁した灰釉、外面下半露胎。見込みに粗い砂による砂粒目。	肥前産17C 初頭
〃 -177	〃	播鉢	-	-	-	暗褐色、石英等小礫を含む。	内外ナデ。	備前?
〃 -178	〃	土師器鍋	19.0	-	-	にぶい橙色 長石、石英粒を含む。	口縁部内外面、上胴部横ナデ、中位以下右上がり叩き、胴部内面横ナデ。	
〃 -179	〃	土師器羽釜	20.8	-	-	浅黄色、石英・チャートの砂粒。	鑄幅2cm、内湾する口縁外面3条の凹線。胴部外面横方向ヘラ削り(右→左)、内面横ハケ。	鑄以下外面煤け

写真図版



調査前風景（北東から）



同 上（東から）



調査前風景（西から）



調査区北部の段部



調査区南部Cトレンチ付近



完掘状況（南から）



SB1 (東から)



SB1 (南から)



調査区南部の切岸と盛土



同 上 (盛土)



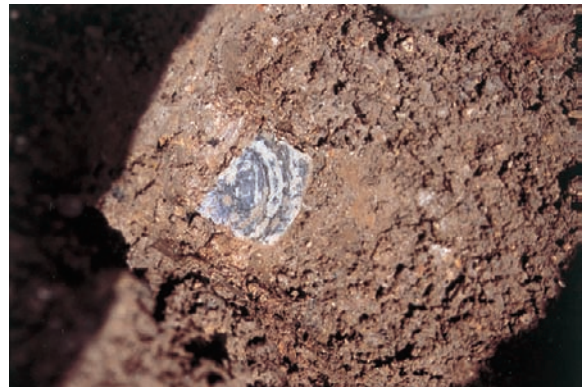
北部段上の集石



SK9 検出面上の礫群



SB1 - P16礎板



P38床出土瓦器碗



SB1・P14 (15)



SB1 - P18床出土青磁碗 (19)



包含層出土陶器皿 (176)



包含層Ⅲ層出土の刀 (108)



SK2出土青磁碗 (25)



P36出土青磁

遺物出土状況



SB1 - P14



同左出土古瀬戸香炉 (18)



SB1 - P18



同左出土瓦器碗 (10)



P32



同左青磁碗 (48)



SB1 - P12

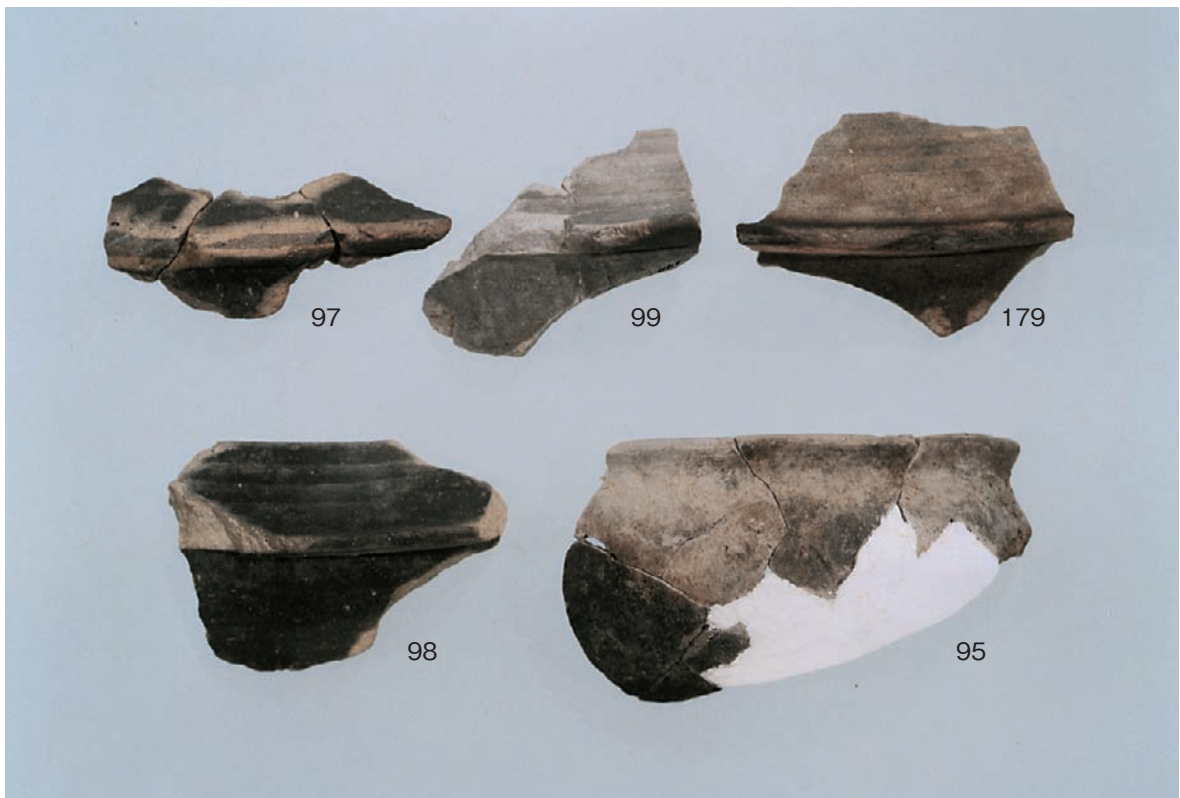


同左土師器杯 (7)

ピット及び遺物出土状況



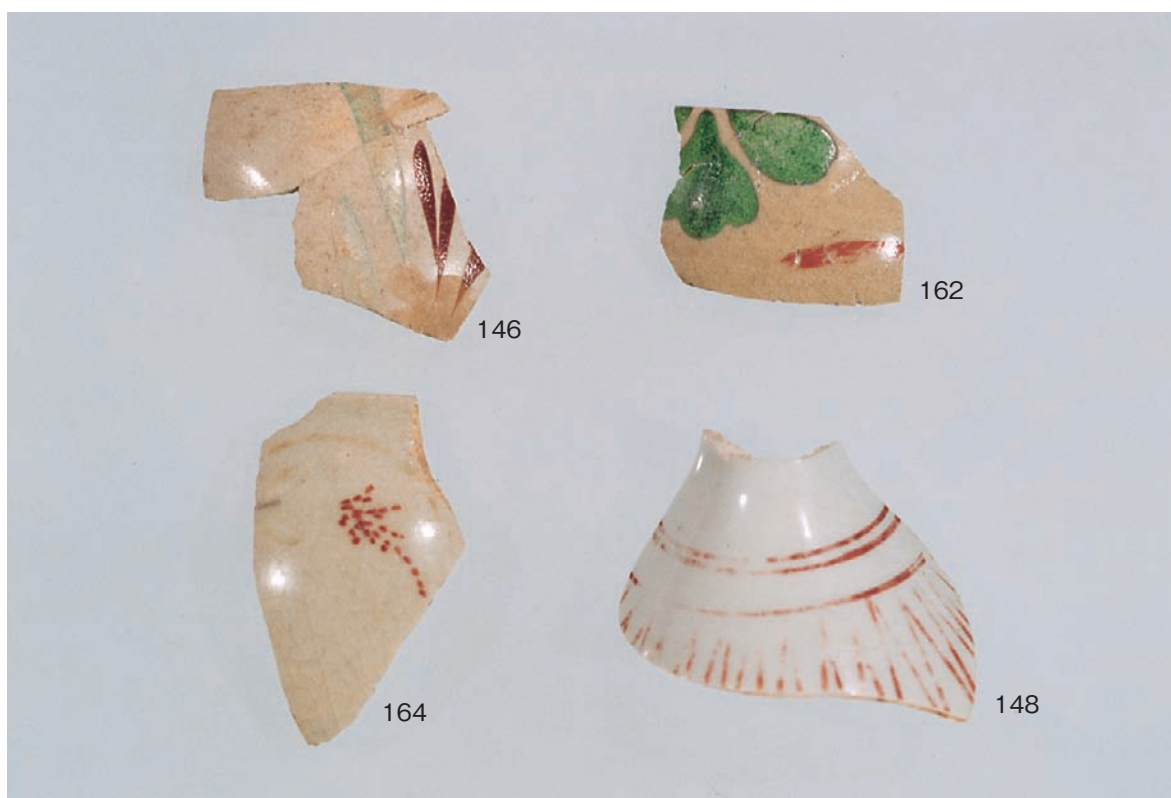
土師器鍋・羽釜



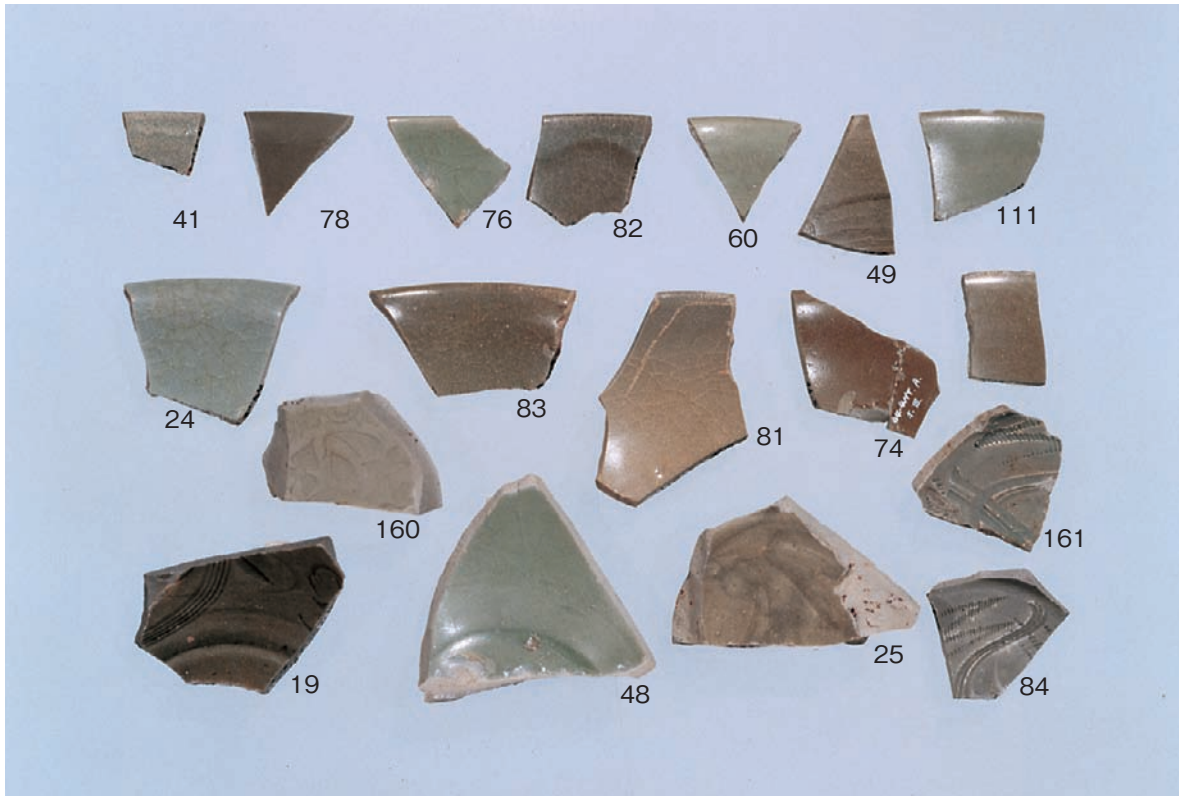
瓦質鍋・羽釜



古瀬戸瓶子 (89・59)、天目茶碗



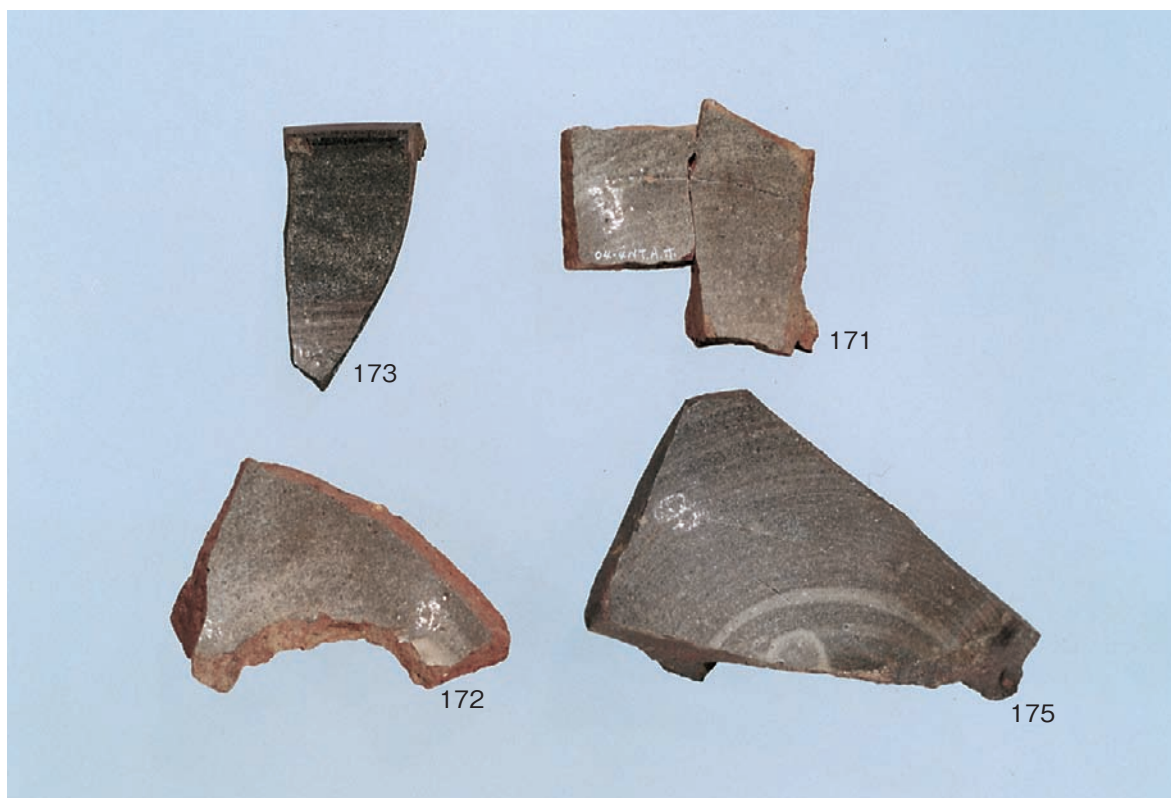
上絵付陶器碗 (146・162・164)、上絵付磁器德利 (148)



青磁碗・皿



同上外面



陶器鉢



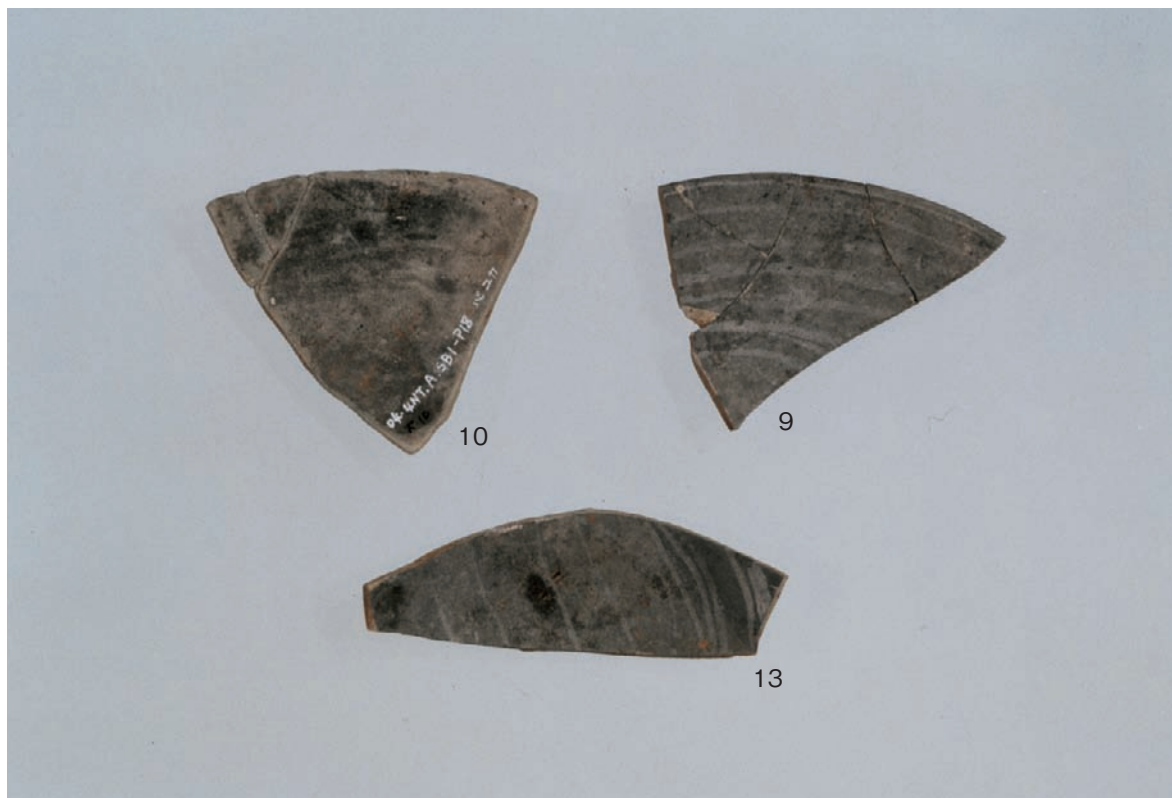
同上外面



肥前産磁器皿



同上外面



瓦 器 椀



白磁皿 (43·44·77·79·80)、杯 (159)



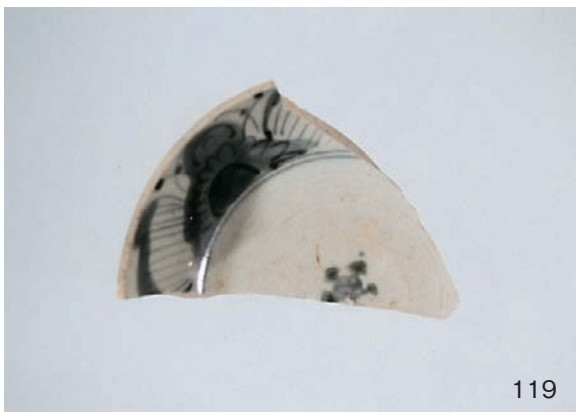
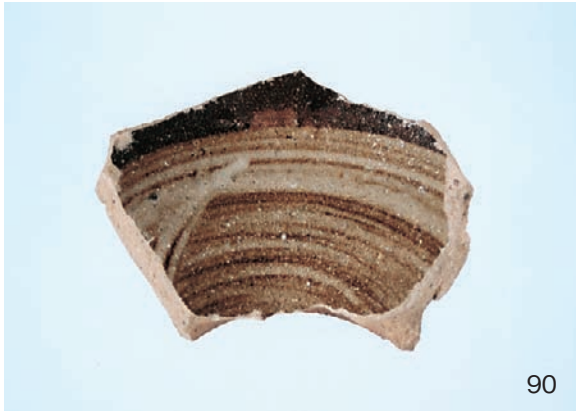
東播系捏鉢（15・17）、備前播鉢（92・93）、土師器捏鉢（112）



同上外面



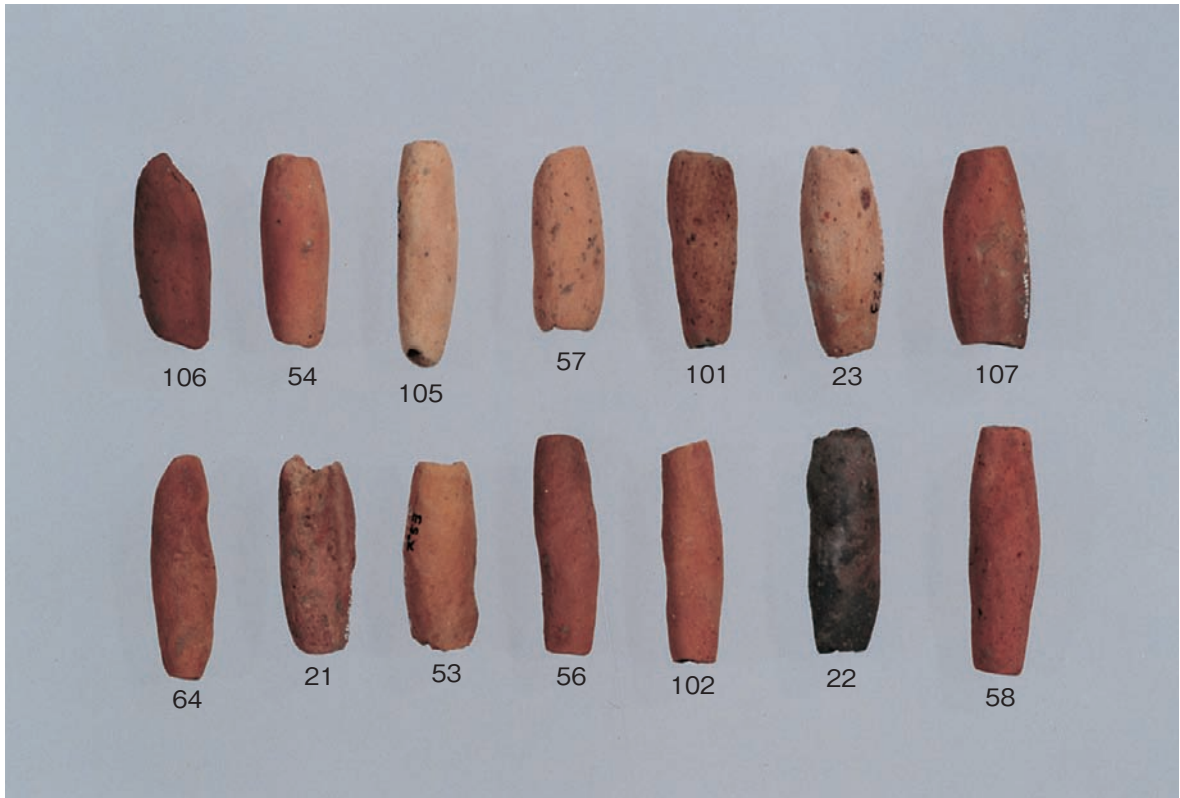
土師器杯 (7・39)、古瀬戸香炉 (18)、肥前産甕 (65)、青磁碗 (91)、肥前系陶器鉢 (155)



肥前系陶器鉢 (90)、肥前産磁器碗 (126・127)、波佐見産磁器皿 (119・120)



波佐見産磁器皿(121)、肥前系磁器蓋(149)、尾戸産陶器碗(151)、肥前産磁器碗(166)、石鍋(61)



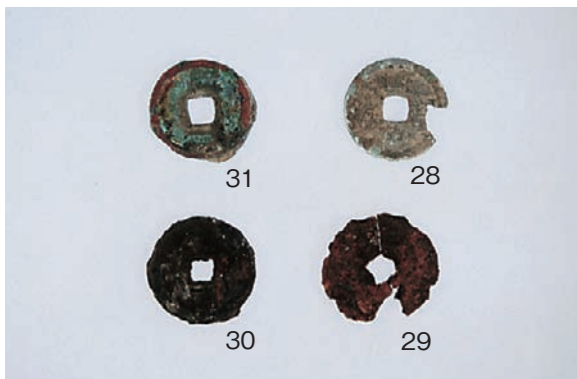
土 錘



刀 (108)



同 左



古 錢



煙管 (32)

青銅金具 (33)

報告書抄録

ふりがな	つぼのうちいせき							
書名	坪ノ内遺跡 I							
副書名	四国横断自動車道路（須崎市～窪川町）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第95集							
編著者名	出原 恵 三							
編集機関	(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原1437-1 TEL088-864-0671							
発行年月日	2006年3月							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つぼのうち 坪ノ内 いせき 遺跡	高知県 たかおかくん 高岡郡 なかとさちよう 中土佐町 くれみちかわ 久礼道の川 つぼのうち 坪ノ内 4645-1	39401	370026	33° 20' 32"	133° 13' 25"	2004年 6月7日 ～ 同 7月15日	1500m ²	高速道路 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
坪ノ内 遺跡	集落	12世紀 ～ 15世紀	掘立柱建物	土師器 貿易陶磁器 瓦器 等		世界標準座標		

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書第95集

坪ノ内遺跡 I

－四国横断自動車道路(須崎市～窪川町)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2006年3月

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
南国市篠原南泉1437-1
電話 088-864-0671

印刷 西村謄写堂